

あるのみです。米屋の手を離れて價值が減るのではありません、米屋の手を離れて臺所で御飯に炊いた方が價值が増して居ります。お鉢の中にあるより嚙んだ方が價值を増して居ります。それを咀嚼して初めて身體を養ふので、此れ又た價值を増すのです。故に此意味から申せば我々の爲す所悉く皆生産であります。百姓も米も生産、臺所で飯を炊く所の人も生産、これを嚙むのも生産である譯です。所がそれでは生産・交換・分配・消費と分けたのは何にもならぬことになります。ソコで通説では米屋迄は生産で米屋からこれを買つて来て我々の一家の經濟に入れた時には、生産で無くなつて仕舞つて反對に消費だと申します。臺所に於て米を炊き飯にする、又此飯を口の中に入れて咀嚼する、胃に満すこと、これは皆消費行爲と認めます。或は衣料に付て言へば、反物となるまでが生産で、呉服屋の手を離れて一軒の主婦の手に入つて裁ち縫ひする、これは生産と申しませぬ消費と言ひます。其物から言へば反物を裁ち縫ひして衣服にすることは大いに價值を増す所以であります。所がそれは生産と言はず消費と致すのです。

### 區別の標準は何

さうなると生産と言ひ消費と言ふ、何かそこに人爲的に定めた區別の標準がなければなりません。其事自身から見れば區別はなく段々價值を増して居るのですが、生産は此處で止つてこれから先は消費だと申

す限界點がなければなりません。所が英吉利流の學者は此問題の性質を究めないで之を曖昧に附して居ります。それが大變に間違を起す基であります。即ち今の例で申すと米を飯にすること、反物を裁ち縫ひして衣服を造ることも、場合によつては消費と見ず生産と見られることがあります。其と申すのは、抑も衣服の裁ち縫ひ、米の調理其事が生産であるかないかといふところが、問題ではないからであります。一軒の家即ち家族經濟の中に這入つて、調理せられる時は生産でなくなるのです。反物が家族經濟に入つて主婦の手によつて裁ち縫ひせられれば生産でなく消費となるのです。然るに同じ事でも裁縫屋が營業として反物を裁ち縫ひをして一枚の衣服を縫つて何十錢といふ縫賃を貰へばこれは生産であります。即ち反物から衣服を生産したのです。米を炊いて飯を拵へる事も左様です、料理屋・宿屋・下宿屋で致す時は生産であります。左様すると、何が此の區別の標準でありますか、之が問題です。

### 貨幣價值が其標準

人生に役に立つことは同じで、割烹屋で炊いても我家で炊いても米は飯にしかならず、又米でなければ飯にはならないのです。反物は衣服にしかありません、何處でやつても同じことあります。然るに裁縫屋でやり、料理屋で致せば生産で、我が家族經濟で致せば、同じ事でも消費だといふのはどういふ譯であ

りませうか。總て人生全體に向つての價值を増すことを生産といふのならば此問題の解決はつきません。我々の爲す事は總て皆生産で消費でないことゝなります。故に凡て價值の増すこと (Wertproduktivität) を生産と認めると云ふことは間違ひであることが明白となります。

抑も經濟上に於て申す價值とは價值の全體ではありません、前篇に於て段々申上げた様に貨幣で言ひ現はした所の價值の謂であります。従つて生産とは此意味の價值の増進を申すのであります。其反對に貨幣で言ひ現はし貨幣で見積られる所の價值が減つて無くなるのを消費と言ふのであります。呉服屋から反物を買ひ、それを我が家で一定の寸法に裁つて衣服にします、此によつて我々の用を満たす力、即ち物其物の價值は増して居りますけれども、モウこれを呉服屋に賣ることは出来ませぬ。即ち貨幣價值は全く無くなるか若くは非常に減じて仕舞ひます。まだ裁たない内ならお返し下さらば代を上げるが裁つて仕舞つては上げられぬとか何割引でなければ頂けぬとか申すでせう。價值は減じたものではありませんが、賣買の目的物として貨幣價值が減つて仕舞つたのです。鐘詰を買つて来て蓋を開けて仕舞へば鐘詰を返す事は出来ませぬ。貨幣價值は蓋をした儘の物にあるのです。蓋をした状態で幾といふ貨幣價值を持って居るのです。蓋を開けて仕舞へば貨幣價值は減じます、即ち消費であります。所が同じことを致しても貨幣價值が増すことがあります。衣服を縫へば十錢なり十五錢なり縫賃を貰へると云ふ場合は貨幣價值が増すのです。即ち

ち貨幣價值を増すことを生産と言ひ、貨幣價值を減ずることを消費と言ふのです。生産・交換・分配・消費と分つ所の標準は、即ち貨幣價值に外ならないので貨幣價值の得喪が標準になつて居ります。即ち生産・交換・分配・消費といふのは物の種類に付ての分方ではありません、貨幣價值上に付て分たのであります。

### 必ずしも墨守を要せず

故に必ずしも之を墨守するに及ばないことは明かです、墨守しても事實の真相と、違つたものが出来来るならばそれを捨てなければなりません。物自らにある所の區別ならば、幾ら學問が進歩しても其區別だけは捨てられません、此英吉利流の四分法は只當時の英吉利の需要に應じたといふだけで、何れの國何れの時代にもやつて宜いといふ譯ではありません。

### 其不可なる點

今日となると其分け方は甚だ不便で、又實際社會の事實にも適しません。殊に交換と分配とを分けることは事實上不可能でもあり、學問上不當でもあります、其事は先へ參つて御話します。又た消費と云ふことを別に分けることも宜敷ありません。此く分けても其實のないことは、何れの經濟書でも消費論は内容

極めて貧弱で一分科を爲すだけのものは決して無いのを見ても知れます。畢竟無いものを強いて分けたから斯う云ふ事になつたのです。其のみならずキチンと四つ宛に分けると云ふのは、如何にも機械的で絶えず變更して已まない經濟現象を取扱ふ方法ではありません。我々はモット實に近く經濟現象の性質に適する方法を取らなければなりません。現に四つに分けてありますが、其中内容の十分に備はつて居るのは生産と分配と丈で、此れ丈は更に四つに分けてありますが、交換と消費には其はありませんし、又經濟學の理論として英吉利で發達して居るものは生産論と分配論で、キアナンと云ふ英國の經濟學者は經濟學史を生産及分配理論丈に限り、交換論と消費論とを度外に置いて居りますが、其れは實際に善く合つた取扱ひ方だと存じます。

### 二分法を取る理由

私は大體に於て經濟本論を二つに分けて生産論と流通論とに致します。近頃出た獨逸の學者數十人の合作に成る一番新しい經濟全書とも申す可き『社會經濟學大系』(Grundriss der Sozialökonomie)と申す書物にも矢張り、Güterverkehr (財の流通) と Güterproduktion (財の生産) とに分けてありまして、私が豫てから唱へて居る所と一致して居ります。

### 生産と流通の自ら異なる點

今日の國民經濟に於ては自から生産と流通との二大別があつて別の方面を爲して居ります。同じ流通經濟の中で營む所ではありますが、天然の物を取扱ふことを主とするものと、人事の關係を處理するものは自から區別があります。無論最終の階段は、人事の關係に於て定まるのですが、我々は其爲に先づ天然に打克つ工夫を致し天然の物や力を取扱はなければなりません、之が生産であります。従つて生産は經濟行爲の最終段階ではありません、云はゞ準備行爲であります。つまりは人事の關係を處理する爲に經過する途中の行程であります。尤も其行程は何れも社會の中で行はれるのですから、又同時に人事の關係を處理しなければなりません。然し其の人事關係は、大抵天然物天然力の取扱ひに直接に關連して居るので、人事關係だけ獨立しては居りません。我々は經濟上の財を造り出すのに必ず費用を要するので、其費用はつまり利用を得る爲の手段であります。生産とは其費用を出す方面のことです。ですから生産論は一名費用論(又は費用經濟論、學者によつては之を苦痛經濟 Pain economy とも名けます)であります。生産と云ふことは我々の目的ではありません、目的を達する爲め的手段行爲であります。故に生産に關聯して起る人事關係も、又た手段としての人事關係で、目的たる人事關係の處理ではありません。常に

限りがあるもので、天然の材料なり天然の力なりのある丈しか生産は出来ないのです。故に生産は有限に打克つ行程であります。

之に反し流通は經濟行爲の終でありませぬ。消費と云ふ事は流通から出た後の事でありまして、國民經濟の眼から申せば云はゞ善後の方法であります。國民經濟から見ますれば流通によつて一切の行爲が結末を告げるのであります。而して流通は専ら人と人との間の關係に付て行はれます、天然物や天然力に關連はしますが、其は生産に於ると反對に却つて從たるものにして、人事關係の處理が流通の主たる方面であります。従つて天然によつて制限せられませぬ、生産が有限の經濟なるに反對して流通は無限の經濟であります。費用の經濟に對して申せば利用の經濟（學者或は之れを Pleasure economy、快樂の經濟とも名けます）であります。

### 貨幣價值と人

生産に於ては貨幣價值が作り出されます、流通に於ては此の貨幣價值が價格となり所得となつて、夫々歸着す可き處に歸着するのであります。故に生産は貨幣價值其物の立場から物事を觀察しますが、流通は此貨幣價值を受取る經濟主體の立場から觀察するのであります。此れが區別の根本であります。從來交換・分配と分け

まして、流通も矢張り富と云ふ立場から見ても富が交換されるのだ、富が分配されるのだと説きましたのは實際に合ひませぬ。流通に於ては如何なる人が如何なる富を受取るかと云ふ様に人から見なければならぬのであります。生産に於ては人と物との關係が大切であります、流通に於ては人と人との關係が中心となつて居ります。以下生産論を先きに説き、次に流通論に及びます。

## 第十五章 生産の意義及形態

### 生産とは貨幣價值を作り出すこと

生産と申すは作り出すと云ふことでありまして、從來の經濟書には富を作り出すことなりと説いてあります。然し此説明は餘程不十分で又た不正確であります。富を作り出すと申すと何か新しい物を作り出す様に聞えますが、人間は如何に努力しても無より有を生ぜしむることは出来ませぬ。物理學で御承知の通り宇宙間の物質は不増不減のものであります、人間の力を以て之を如何ともすることは出来ませぬ。人間の爲し得る所は唯物質の形狀を變じ、一のエネルギー態を他のエネルギー態に移らせること丈けであります。

す。故に生産と申しても新たに物質を作り出すのではなく唯だ物質の形状を變へることを云ふ外はないのです。さて富を生産すと申すは必竟人間の生活を進むるに足る資格を作り出すと云ふことで、(之が即ち厚生を増進です) 約めて申せば價值を作り出す又は殖やすことの謂であります。或物質を捉へて其れをより多く人間の用に適する様な形状に變ぜしめるのは即ち其價值を殖やし及び作り出す所以であります。故に近來の學者中には富の生産と云ふのは妥當でない須らく價值の生産又は創造と改む可しと主張するものもあります。然しこれもまだ徹底した説とは申されません。何故となれば價值を殖やし又た作り出すことは必ずしも悉く生産として經濟上に於て取扱はれて居らないからです。今日の經濟生活に於ては價值が出来ても其れが貨幣價值とならなければ生産とは認めないのです。尤も大抵の場合には貨幣價值を作り出すには價值を作り出さなければならず、又た價值を作り出せば大抵の場合には貨幣價值を作り出すことになりす。或物質の形状を變へ或物と他の物とを組合せて以前よりも更らに多く人間の用に適する様に致せば其れが爲めに價值は作り出されます、價值が作り出されますと之を市場へ出せば其れ丈の貨幣價值を認められるのが通例であります。併しこれは一般の場合に就て申すことで時によつては必ずしも左様でなることがあります。

價值を作ることには必ずしも貨幣價值を作ることにあらず

例へば一萬圓の資本を投じて製鐵工場を經營します、所が十箇年間經營した結果、一萬圓の資本が皆缺損したと假定します。此場合無論若干の物は作られたのです、乍併貨幣價值は殖えないのみならず却て一萬圓減じて居ます。其は生産ではないのです、大抵の場合に於て貨幣價值を造るには價值を造ることから始めますが、目的は貨幣價值を造るにあることを忘れてはならぬのです。紡績會社が何千人かの工女を使つて何萬梱の絲を紡ぎます、其目的は何であるかといふと絲を何萬梱造るといふこと其事ではありません、其は從たる目的であります。絲を造らなければ主たる目的が達せられないから作るので、其れだけでは目的は達せられないのです。紡績會社が多數の人を使ひ、多額の資本を使つて事業を經營するのは詰り利益を得る、貨幣價值を殖やす爲めです、此が主たる目的であります。百萬圓の資本に對して一箇年に十萬圓なり二十萬圓なりの收益を擧げるといふこと此れが目的です。收益を擧げるには絲を造らなければならぬから絲を造りますが、萬一絲を少く造つた方が却て收益が多いならば少く作つて目的を達することを勉むるものであります。前に例證致した朝鮮で或會社が人參を焼いたのと同じであります。

生産制限の實例

我邦の紡績會社は今日同じ様な事を實際にやつて居ります。即ち紡績聯合會と云ふものがありまして大阪に其本部を置いてあります。それは多くの紡績會社が聯合して設けたもので、其主たる事業は聯合して生産高を制限することであり、各會社の持つ居る機械を能率全部だけ働かせて造ると、出来過ぎて却て損が行くから生産高を制限するので、然るに一會社が生産高を減しても外の會社が生産高を減して居らねば何にもなりません。それで各社聯合して、銘々歩合を極めてこれより以上は紡ぐまいといふ制限をするのです。抑も物の殖えるといふことは供給を裕にする所以でありますから、此點から見れば聯合して生産高を制限するといふは不都合な行爲の様に考へられます。紡績絲が有り餘つて仕方がないといふ譯はありません。日本中にはまだ絲が高くて困る人が幾らも居ります。衣服が有餘つて居る所ではなく、無くて困つて居る者が澤山居ります。無くて困らぬでもモウ一枚欲しい人が幾らも居ります。何の道紡績絲が有餘るといふことはないのです。然るに絲が出来過ぎたといふ、是は甚だ奇妙な現象であります。何故此くの如き矛盾が起るかと申すと、詰り紡績會社は絲を造るのを目的とするのでなく金儲けをするを目的とするからであります。絲を多く造つても収益が減つては目的に反しますから相互に申合せて操業の短縮、

或は夜業の禁止によつて生産高を制限して、絲の價格を引上げて全體の収益を多くしやうとするのです。即ち紡績會社は貨幣價値を造り出すを目的とするもので、紡績絲を造り出すは只其目的を達する一の手段であることは此で御分りになります。臺灣の砂糖會社の間にも臺灣糖業聯合會といふものがあります。紡績聯合會程には未だ行て居らぬ様ですが同じ様なことを計劃して居ります。即ち臺灣各製糖會社は此の聯合によつて供給の調節をしやうと云ふのであります。日本全體から見れば、砂糖が有餘るならモツト安くしたら宜いに相違ありませんが、製糖會社から云ふと砂糖を安くして日本に供給するよりも、自分の所の利益を多くするが目的でありますから供給高を制限するのであります。

極端なる生産獨占の弊害

此の如き事は餘り極端になると國民經濟を大に害することになります。今日の社會では或度迄は已むを得ないとして居るのであります。どれ丈斯の如きことを許すかは今後に起つて来る可き大問題であります。亞米利加に於ては今日既に此れが爲めに非常に苦しめられて居ります。例へばスタンダード石油會社が起つて亞米利加の石油は皆此會社の極め次第で値が極ります。此會社は或る競争者を壓倒しやうといふ時はドン／＼安くして賣出します。而してそれを倒して仕舞へば値段をドツと上げます、此横暴は實に

甚だしいものであります。又亞米利加煙草會社と云ふのがありまして、亞米利加で生産する卷煙草の九割迄は獨占して居ります。此獨占を得る爲に用ひた手段は極めて惡辣なもので、態と他の煙草屋の隣へ大きな小賣店を初めて、良い煙草をドン／＼安く賣ります。安くて善い煙草が買へれば御客は皆そこへ行きますから一方は倒れます、左様すると翌日から値段を高くするので、一時安く賣た損害は直ぐ回復するので、此くして他の煙草業者を皆倒して終に市場を獨占して仕舞つたのです。亞米利加鋼鐵會社と云ふのも矢張り同様な事を致して鋼鐵業を獨占して居ります。是等は皆何れも貨幣價値の増進のみを圖つて突進する極端な例であります。其極端が極端でなく餘程原則的になつて來たのが亞米利加の現状でありまして、實に重大な問題であります。日本では未だ中々左様なつて居りませんが早晚さうならないとは言へませぬ。亞米利加程の事は逆もないとしても、亞米利加に類似な現象が起ることは絶無とは申せまいと存じます。

### 技術的生産と經濟的生産

兎に角今日の經濟組織に於ては生産は價値を造り出すこと其事を云ふのでなく、主として貨幣價値を造ることを云ふものなることは以上の説明で粗御分りになつたことと存じます。故に學者によると、生産に技術的生産と經濟的生産の區別があると主張しまして、右申す意味の生産は經濟的生産であると説きます、

従つて技術的生産なるものがまだ外にあると申します。即ち生産は新なる物質を作り出すことではないは勿論であるが、又價値を作り出すことでもない、いくら骨を折つて人の用に適する様に材料の形狀を變じても、其が果して實際價値ありと認めらる可きや否やは生産者が如何ともするとの出來ない所で、世上一般の認定による外はないのである、生産者は之までも支配するものではない、生産者は世上一般に價値ありと認めて呉れるだらうと云ふ期待を以て、此の條件に適する様に手續を盡くすのみである。其以上は唯だ世間の認定を待つの外はないと申します。生産者としては此等一切の手續を盡くして形狀を變化して之を世上に送り出すのみで、或は折角骨を折つても世間では價値を認めて呉れないかも知れないが、其れだとて其爲した事は生産でないとは云へない、技術上に於ては立派に生産をしたものである。唯だ經濟上生産とならないだけであると説くのであります。

### 區別する必要なし

成程此説には一理あります、然し、私は生産を此く二つに分ける必要を認めません。經濟上に於て生産を論ずるには經濟上の立場からのみす可きで、別に技術上の生産なるものありと申すのは道理上不當であると存じます。而して今日は貨幣經濟の世の中でありまますから、其價値も價値の凡てを申すのでなく、

貨幣價值のみを意味するものと解釋するのが一番適當だと考へます。生産者が或期待を以て技術上一切の手段を盡くして物の形狀を變化したと云ふ丈では、經濟上の問題とはならないのです。其期待が的中して流通場裡に於て其れだけ貨幣價值を認められる様になつて始めて生産の意味が完全になるのであります。單に手續だけを済して足れりとするものでなく途中の準備や行程だけを以て生産の能事終れりとするのでありません。ですから自足經濟に於ける生産と今日の流通經濟に於ける生産とを一つに見ることは出来ません。自足經濟に於ては人が見てより多く用に適する様になつたと認める様に物の形狀を變ずることが生産で、其以上の考へは這入つて居ないのであります。流通經濟に於ける生産は、其以上更に此く認められることが自から貨幣價值の上に現はれて、より多く貨幣價值ありとせらるゝ様にならなければ生産とは申されないのであります。

### 費用も貨幣價值なり

總て生産には費用が要ります。費用を提供して更らにより多く利用を得るのが生産でありまして、前編に説明した收支の按排と云ふことは生産にも必ず伴ふのであります。自足經濟に於ては一定の物質材料を費用として、更に新しい形の利用の多いものを作り出すことが生産であります。然るに貨幣經濟に於て

は、其費用も利用も共に一の貨幣價值であります。紡績絲一梱を作るに綿何百斤を費します、自足經濟に於ては問題は其れだけで済みます。貨幣經濟に於ては費した綿の貨幣價值は金何圓で、作り上げた絲は金何圓であると見ます。而して綿の金額より絲の金額の方が多くなつて初めて生産があつたものと見るのです。斯く費用にも利用にも貨幣價值が認められるのは、生産が流通市場と關連して居るからであります。

### 生産は流通の支配を受く

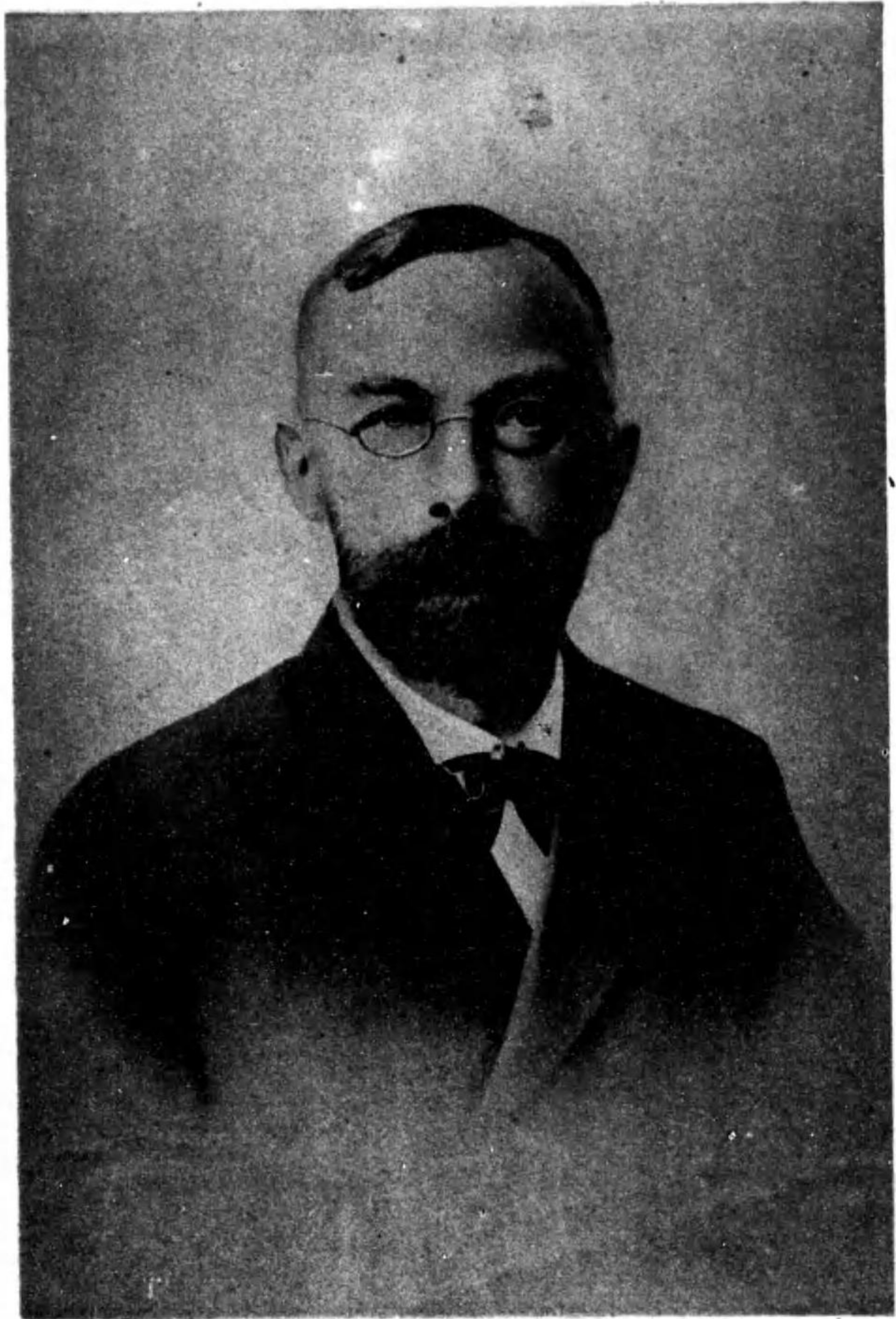
さてかく費用にも利用にも貨幣價值を認めるのは、流通上の問題でありまして生産其事に於て存するものではありません。従つて前章に説明致した通り人間の經濟生活から見れば、生産は一の道行であります。一の準備行為であります。其最終の判定者は流通でありまして生産は獨立した行為ではないのです。技術的生產と經濟的生產とを區別する學者は、此點に餘り重きを置き過ぎまして、而も生産を一の獨立行為と認めやうとする爲めに、生産と云へば其は主として技術的の行為である、經濟的の生産とは自から別問題であると主張するのであります。此は私を以て見れば間違であります。生産は一の獨立行為ではありません。流通を待つて始めて完全に意味を發揮するもので、云はゞ半分の行為たるに過ぎないものであります。實際生産に従事する者は、常に技術上の生産だけすれば宜しいと思つて、其れだけを己の分として



居るものではありません。常に流通場裡の變遷に注意して之に應ずることを勉めて居ります。即ち總ての生産者は流通の支配を受けて居るものであります。生産は流通の支配を受けて居るものであつて、其自らでは完結することの出来ない半分の行爲であります。

### 營利生産と非營利生産

生産を技術的生産と經濟的生産とに區別する學者は、又生産と營利との區別を致し、従つて又た生産力と營利力とを對立せしめます。此立場から申すと、生産には又た營利生産と非營利生産とがあることになつて、營利とは貨幣價值に見積られ測られる利益を得ることを申します、其の利益を得ることを目的とする生産を營利生産と名け、其の目的のないものを非營利生産と稱するのであります。此區別は必ずしも誤りであるとは存じませんが、畢竟不徹底な區別と存じます。今日の生産は流通を待つて始めて意味が完結し終局するものである以上は、何れか營利生産ならざらんと申す可きで、又た實際の生活に於て非營利生産は之を生産とは認めません。即ち前にも例證致した我々一家内に於て食物を調理したり衣服を裁縫したりすることは價値を作り出すとて、所謂技術的生産には相違ありません。然るに今日の經濟上に於ては此等の行爲は消費と認めます、決して生産とは認めません。商賣として食物を割烹したり衣服を裁縫した



—アヒュプ・ルーカ  
Karl Bücher  
(1847— )

りすることは今日でも之を生産と認めます。是れ即ち今日生産と申すは何れも營利生産のことを云ふ所以を明示するものであります。

### 生産の三形態

私が獨逸に於て最初に就きました師のブヒアー先生は生産の發達を論じて、之に三形態あると申され  
ます。即ち 一自己生産 二注文生産 三商品生産（又市場生産）と致します。是は生産を歴史の上に就  
て最も廣く觀察して立てた區別でありまして、右申す意味の生産よりは遙かに廣いのです。右申す生産と  
は今日の最も發達した流通經濟に就て申すものなることは勿論であります。即ち主としてブヒアー先  
生は第三段と稱する商品生産又は市場生産のみを生産と認めるのであります。一家内の食物の調理・衣服  
の裁縫等はブヒアー先生の所謂自己生産に當るのであります。今日は自己生産は大抵之を消費として  
して、生産とはしないのです。

### 廣き意味の生産

然し又た説明の便宜上、生産と云ふ語を此く廣い意味に用ひることは必ずしも差支はありません。唯其

場合には今日現實の生産のことでなく、廣い意味で申すものなることを一々明かに斷はる必要がありま  
す。此く廣い意味で申す時の生産とても、決して單に所謂技術上の生産を申すのではあまりせん、矢張終  
局に於て人が之を認めて人の用を足すに適すとせなければ生産とはならないのです。即ち總て價値を作り  
出すことを廣い意味で生産と申すのです。

### 自己生産

自己生産と申すは自足經濟に於て、自己の用の爲にする生産を申すのであります。茲に自己と申すは必  
ずしも個人の事ではありません。自己の一經濟・自己の家の事です。即ち此時代に於ては生産は總て一軒  
の家の中で其家の爲にするのです。其代り生産した物は直ぐそこで消費します。従つて生産と消費とは同  
じ所で行はれて、同じ所でお終になつて仕舞ふのです。家は生産の單位であつて同時に消費の單位であり  
ます。生産は家の中で行はれて、家の外に消費が涉ることはないのです。今日でも田舎の農家では此状態  
が行はれて居ることは第一編に御話致した通りであります。即ち飯米は自己の家で作し、着る衣服は手織  
で造ります、これが自己生産であります。田舎の農家でなくても都會の方の生活でも全然自己生産はない  
ことはないのです、誰でも多少の自己生産を致します。殊に家族經濟は一つの自己生産團體であります。米

を飯にするとか反物を衣服にするのは、貨幣價値から言へば消費であります、廣い意味の生産から申せ  
ば自己生産であります。

### 自己生産廢す可からず

社會主義者の中には貨幣經濟の全廢を主張する立場から、家族經濟を打破して、各家で壺を別にして小  
さな道具立をして飯を炊き魚を焼き肉を煮るといふのは不經濟だから、共同にして大袈裟にドン／＼拵へ  
た方が美味くて安く出来ると申して、共同消費即ち共同自己生産をしようとする者があります。けれども  
それは今迄の實行上から見て駄目であります。或時期の間或非常の時に於ては出来ず。例へば兵營とか  
學校の寄宿舎とか監獄とかいふ所では出来ませんが、國民全體の生活を擧げて家族的の自己生産を止めて仕  
舞ふことは出来ません。成程物の上の儉約といふ點から言へば、銘々の家で少しづつ造るよりも合併した  
方が勞が少なくて宜いに相違ありません。五人の爲に飯を炊くのも十人の爲に飯を炊くのも人間の働きは太  
した違ひはありません。十人の爲に一人が専門に飯を炊いても大した違ひはありません。けれどもそれ  
は人間の經濟生活の何者たるかを知らぬ一つの空論であります。社會主義其他の論者中には随分共產主義  
の實行を眞面目に主張するものもありますが、何れの時代の共產主義でも皆失敗の歴史許りです（ノルド

フと云ふ人の『米國に於ける共産村』と云ふ本は、此等の實例を踏査して面白く記述した有益なものであります。其によると、共産村の多くは、何れも個人家族に分解して仕舞つたことが善く分ります。人類は進む程分業的になつてくるものです。國家の事業市町村の事業其他の共同經濟は段々範圍を擴張するに相違ありませんが、我々の自己生産自分の身に最も近い經濟行爲だけは矢張り小さな家族といふ關門を拵へて、これは我が城塞なりとして立籠つてやることは、謂ゆる物の經濟から言たら不經濟ですが、心の經濟から言へば遙に經濟であります。成程合同した方が美味くも安くも出来るでせうが、それは物に付ての經濟で心に付て言へば反對であります。我家で作つたものが美味しく感ぜられるのです。而して家族的自己生産を維持することは、總て家族の神聖と獨立とを維持し、個性の權威を保つ上に於て是非缺く可からざる經濟心理上の根本的要件であります。ですからどんな文明の世になつても自己生産は全く無くなるといふことは考へられないのです。

### 註文生産

自己生産から一段進んだのが註文生産であります。これは他人の註文を得て初て生産することを申すのです。即ち自己の爲にするのではなく、人の爲にする生産であります。其爲にする所の人から特別に命令を受け、特別の依頼を受けて生産するのです。註文を受けて註文された丈けの物を拵へる、それ以外の物は造らないのです。

### 註文生産は工業發達の起り

これが歐羅巴に於きましても日本に於きましても中世長く行はれて、今日の謂ゆる工業といふのは多くは此註文生産として發達して來たのであります。中世の工業品に中々精巧なものがあります。此等は大抵工業家其人が勝手に考へて拵へるのではなく有力な保護者があつて其註文によつて生産したものです。豪商或は貴族或は宮廷から保護があつて初めて拵へるのです。例へば加賀の九谷焼は今日は註文生産は少く大抵は商品生産で作られるのですが、九谷焼の初まつた起りは藩公が態々伊萬里から名工を求めて、それが加賀へ來て産を開いたのが初めでありました。代々此處に居て生産品は註文品であつたので、拵へれば吃度其だけの價が貰へます。又保護獎勵の爲にする註文ですから、日數も限らなければ費用も限らないで、十分能力を盡して拵へたから、到底今日真似の出來ぬ様な立派な精巧なものが出來ました。薩摩焼もさうであります。御庭焼と言つて、註文どころでなく、藩公が工場迄も拵へて下さり材料も與へ繪の模様を名工に描かせて焼いたので、實に立派なものが出来ました。其から昔の武士の刀或は甲冑、さういふものは

大抵保護的意味を以て註文生産をさせたのです、漆器でもさうでありまして特別の保護的註文主があつた所に於て發達したのが多いのです。天然の狀況が善い許りでなく、人事上社會上の特別の保護のあつた所に各種の工業が發達したのです。

### 西洋でも同様

西洋でも九谷焼と同じ様に特別保護の下に發達した陶器が多くあります。今西洋で最も有名な陶器は和蘭ではデルフト、佛蘭西ではセーヴル、獨逸ではマイセン等ですが是等は皆特に王室の保護の下に其用命を受けて造り始めたものです。又織物にしても佛蘭西のゴブランといふ非常な精巧な織物は、ルイ十三世の頃朝廷で特別な註文をして保護の下に發達したのです。其他大工・左官・屋根屋・石屋・武器・馬具・金屬器・其他各種の工業何れも註文生産であつたのです。これ／＼の材料で斯うしてやつて呉れと註文すれば、之を引受けてやるのです。今頃古渡り唐棧を買はうと言つてもありません、夫よりは最も安くモツト體裁の宜いものがいくらも出來て居ります。此は御客の好みで作るのでなく拵へる方の好みで作つて市場に出すので、我々は其に従つていかなければならないので又其が便利でもありますが、昔は織物殊に善い織物は御客の註文を待て初めて生産するが常でありました。即ちパターンを貰つて其意匠に基いて織

るのです。毛織物でも絹織物でもさうです。殊にレース製造の最も發達したのは伊太利のヴェニスですが、是れ又註文生産として起つたのであります。天鵝絨も同じくヴェニスの特産で註文生産に依つて出來たものです。贅澤な織物は無暗に拵へても賣れません、註文を受けて始めて造り出すのです。贅澤な諸侯があつて、金を掛けて澤山天鵝絨を造つたと言つて誇つたものであります。註文生産は獨り高價な品に限りません。極く平民的な値の安い處の工業品にしても大抵註文生産でありました。

### 註文生産は絶滅せず

今日でも鍛冶屋杯といふものは註文生産で殊に鑄掛屋錠前直しとか飾屋とか亞鉛屋とかは註文生産で拵へます。其から人事に關することでもさうで、人間の裝飾に關する所の女の頭の髪、男の頭の髪なども、頭を持って行かなければ結ぶことも刈ることも出來ません、幾ら床屋が暇だからと言つて五分刈を澤山拵へて置く譯には行きませんが、丸髷を結つて置くことは出來ません、人が註文して始めて出來るのです。大工は今でも註文生産を主としますが、又暇な時を利用して自分で材料を買入れて色々器具を拵へます、踏臺・雪掻・塵取などを造ります、これは註文生産ではありません、商品生産であります。所が床屋髪結は兩方は出來ません、註文生産の外はありません。高等自由職業即ち醫者・辯護士・齒醫者・坊さん・神

主等は皆一定の需要があつて始めて仕事にかゝるのです。

### 註文生産の特色

註文生産の特色は生産者と消費者とが直接に取引して其間に何等仲介のないこと是れであります。自己生産の様に生産と消費とが同一人又は同一經濟の手に合併して居りませんが、分離して居ますが其間の距離は極めて近いのです。生産者は消費者と同じ村なり町なりに住んで居て絶えず其目の前にある譯です。従つて不正行爲をすれば直ぐに信用を失ひますし、又た制裁を蒙ります、所謂商業道德に關する非難は却て存しないのであります。

### 商品生産

註文生産の次に來るのは商品生産であります。即ち客の註文を待つまでもなく、生産者が自ら計劃を立て自らの創意に基いて世上の需要を見越して物を生産し之を商品として市場に提供するのです。生産の技術は同じで作ります品に變りはなくとも、生産者が生産を営む目的が丸で違ふのです。而して註文生産に於ける如く客の註文に應ずるのでありませんから、何等掣肘を受けないので、生産者は全く獨立の意思により自己の考へ通り生産に従事します。従つて又た不正な物を作つて世間を欺くと云ふことも起ります。商業道德の問題は註文生産時代の遺風が未だ脱し切らないのに、商品生産が段々普及して來る國に多く起るもので、我邦今日の工業の如き恰も此過渡時代にあるのです。

### 商品生産全盛の勢

今日は商品生産の時代だからと申しても、自己生産は無論ありますし又註文生産も行はれて居ります。種類によつては如何しても商品生産によるものが出來ないものもあります。例へば建築業の如き此であります。家や工場を築め見越して作つて置くといふ譯にゆきません。需要者の望に應じて設計を作り之に基いて家を建てる外はありません。然し建築業でも段々商品生産が殖えて來ました。即ち建築の全體は註文生産によりますけれども、部分的の物は商品生産で多く出來る様になりました。西洋では窓だの戸だのまでも商品として出來上つたものを賣つて居ます。我邦でも建具の類は上等なもの特別なものは今でも註文生産によるのですが、普通の品ならばイクラも出來合を賣つて居ります。斯くして商品生産は着々註文生産の範圍を蠶食して行くのであります。況んや一般の工業に於ては註文生産は全く商品生産によつて取つて換はられて仕舞つたので、唯だ修繕とか改造とか云ふ場合だけは不得已註文生産によるのです。手近

い例を申せば、靴等は注文生産もありませんが出来合に立派なのが出来る様になつて、商品生産が大に其領分を肩して來ましたが、之を修繕するには注文生産による外はないのであります。西洋では洋服の裁縫は出来合ひ服が多く行はれる様になつて、注文生産が商品生産の爲めに取つて換はれましたが、縫直しの場合には注文生産によらねばならぬのであります。

### 機械的生産の發達

商品生産は機械製造に於て殊に發達して居ますが、機械を製造するに又機械を以てする機械の機械製造が發達して、所謂代替式生産が起つて殊に注文生産を驅逐しました。代替式生産とは英語でシステム・オブ・インターチェンジブル・パーツ System of interchangeable parts と申します。其は機械を以て機械の各部分を製造しますから、作る處の品は極めて正確に皆均一でありまして何れを以て行つてもチャント當てはまるのです。例へば第何番の何形の齒車とさへ云へば澤山其れが拵へてありますから、其が損しても態々職工に頼んで特に其れだけのものを注文生産をやらせないでも、目錄の番號を其製造元へ言つてやりさへすれば直ぐに其番號の齒車を送つて來る、唯之れを必要の場所へ取着けさへすれば済むのです。即ち修繕も亦商品生産によつて濟ませる様になるので、複雑精巧な機械でも正確に同じものが出来ますから何

時でも一部分の改造なり修繕をすることが出来ます。時計等も従來は安い時計は機械で製造しましたが上等の時計となると一々手先で作らねばならぬものとなつて居まして、米國の機械製の時計は瑞西の手先製時計に逆も及ばぬとしてあつたのですが、今日では瑞西の時計も段々機械で作る様になりました。機械製なれば一部分だけの修繕改造が容易に出來ます、何號のテムブ何號のゼンマイ何號の車とか云へば、キツチリ其れと同じものが何時でも得られるからです。此くの如くして注文生産の範圍は段々狹められ、商品生産の領分が大に擴張するのであります、今日に於ては此の商品生産が生産の大部分を占めるやうになりました。

### 市場生産

さて商品として作るとすれば之れを市場に賣出すことを要します。生産者から直ちに消費者の手に渡るのでありません、途中に仲介者を要します。即ち一度は必ず商人なる仲介者の手を経ます。問屋なり小賣商人なり何人かの手を経て後始めて消費者の手に入るので、其間は即ち市場に於て何回か轉賣します。故に生産者は常に市場を當てとして生産するので、又市場の情況に左右せられます。従つて商品生産を一名市場生産と名けます。市場生産となつて生産は全く流通の支配の下に立つ様になりまして、前に申上げた

様に生産は半分の行爲たるに過ぎない様になり、市場に流通して始めて完結を見、始めて其目的を實現することゝなります。

### 商品生産は廢す可からず

右申述べた生産の三形態は専ら歴史的發達の上から見たのでありまして、今日に於ても三形態共に存しては居ますが、其重要の度には大なる差違がありまして、自己生産は殆ど之を生産と認めない様になり、註文生産は補充的のものと看做さるゝ様になりました。従つて單に生産と申せば専ら商品生産のことを指して云ふ様になりました、愈々以て貨幣價値を作り出すことのみを生産と認むる事實が確立して來たのです。社會主義者共產主義者等は此状態を不可なりとして、昔の自己生産又は註文生産へ引戻さうと主張するのですが、其は到底空想たるを免れません。商品生産營利生産には無論幾多の弊害はあります。然し弊害を厭つて商品生産其ものを全廢すれば、今日の様に發達したる經濟生活は逆も之を維持することは出來ないのであります。故に問題は如何にして商品生産に伴ふ弊害を除いて其長所のみを發達せしめ得可きかと云ふ點にありまして、商品生産其ものゝ存否を問題とすることは不可能であります。

## 第十六章 營利・營業及職業

### 營利と生産

營利とは既に屢々説明致した通り、貨幣價値を收得する行爲を云ひます。従つて前章に申上げた今日の狭い意味にての生産は、何れも皆營利でありまして、生産と營利とは全く一致するものであります。之に反して生産の意味を廣く取りますれば、營利たるもあり、營利たらずるものもあります。其又反對に營利は生産のみならず、其以外のことをも含むものとも云へます。乃ち學者によつては、營利には生産行爲と流通行爲との二つありと申すのであります。此は主として商業・運輸交通業等を生産とは認めないが營利と認めると云ふ點から出で來る説であります。商業や運輸交通業も亦生産なりと致せば、生産と營利とは全く一致することになります。此は強て争ふに及ばぬことでありまして、何れの見解を取るも大して差支ないことゝ存じます。



營業の意義

營業は之を繼續的に營むとき、即ち一定の業とするときは之を營業と申します。營業に對して、個々の營利的行動を營利行爲と申します。故に營業とは、連續的營利行爲の謂なりと申して差支ないのであります。營業の觀念に於て重きを置く所は營利と云ふことであります。即ち單純に生計を立てる爲にするとは之を營業と名づけないので、主として流通場裡に馳驅して貨幣價値の收得を圖る場合に營業と申します。従つて重きを置く點は、其貨幣價値の收得に就て全責任を負ひ、之に要する一切の事を自ら主宰すると云ふ一事であります。

職業の意義

職業とは人が自家生活維持の爲めに、其住む所の經濟組織内に其々に定まつてある常業の何れかを選択して、繼續的に身を之に任ねることを云ふのであります。而して其れによつて、社會に於ける其人々の身分・地位などが粗ぼ定められることになるのであります。此常業は自足經濟に於ては自足的の生産業であります。今日の營利經濟に於ては主として營利生産上の業であります。故に今日に於ては、職業は其形

に於ては概ね營利行爲の連續であります。常業と申す所以は、個々の行爲を云ふのでなく、一定の期間連續して一定同一の行爲を繰返すことを申すのであります。經濟組織の中に於ては、此くの如き連續的の常業が其々に成立つて居ります。従つて各人は己の好む所、己の適する所、又は習慣の定むる所に従つて、其何れかを選択して、之を己の職業とするのであります。今日の國民經濟に於ては其の何れを選定するも人々の自由に任せてあります。此が即ち職業の自由であります。但し事實上は必ずしも完全な自由の存せざる場合もあります、唯だ原則として自由を認めてあるのです。

營業と職業の異同

従つて、營業は必ずしも職業とは一致しないことが明かであります。職業も亦一定の業として連續的に營む行爲を云ふのでありますから、營業と共通の點を有して居ります。加之今日の實際生活に於ては、多くの場合に於て營業と職業とは一致するのでありますから、人多く兩者を全く同一視するのですが、其は正確とは申されません。今日に於ては人の職業は大抵流通場裡に於て定まり、而して單に生計を立てるに安んぜず、貨幣價値の收得累積を期するものであります。如何に卑き職業、如何に收入少き職業でも、皆營利的の形に於て營まれますから、之は同時に營業であります。然し乍ら兩者の間には重要な

差違があります。其は何であるかと申すと、職業は主として之を営む人の立場から申すことで、營業は營業まるゝ業の立場から申すことであります。人が其の生活維持の爲めに、繼續的に身を投じて營む所のものが、職業でありまして、其人の身分・人格は其職業の爲めに定められ、永く其人に一の色彩を與へます。獨逸の諺に『職業は人を色付ける』と申すことがあります。營業とは或る業が繼續的の營利行爲として營まるゝ有様を指して申すのであります。故に職業は主觀的の觀念で、營業は客觀的の觀念なりと申しても大過はないのです。

今日の流通經濟に於ては、財産によつて衣食する人を除いては、各經濟主體たる人は、其生活維持の爲め流通場裡に入つて何等かの營利行爲を營まなければならぬのであります。然るに、此營利行爲は間斷なく之れを連續して行くにあらざれば、安全なる生計を期することは出来ません、時々間歇的に思付き次第に、個々の營利行爲を營んで行くのでは、獨立の家計を立てることも出来ず、又營利行爲に於ても成效を必することが出来ません、大抵な人は同一種の營利行爲を連續的に營み、己の一身を全く之に投じ去つて全力を擧げて従事して居るのであります、茲に於て職業なるものが存立するのであります。故に今日に於ては、職業と云ふ形に於て凡ての經濟行爲が營まるゝのであります、必ずしも營利心の全支配の下に立つのでなく、一家の計を立つる丈で満足する人でも、其行爲は之を營利行爲として、而も繼續的に爲

さねばならぬことになつて居るのであります。従つて、同じく職業と申しても、徹頭徹尾營利的のものもありますし、其精神は敢て營利的でなく、唯其形が營利的たるに止まるものもあります。然るに營業と申すときには、徹頭徹尾營利的のものであります、従つて之を主宰する人は純營利的人であります。營利の特色は、事業に關連する一切の責任を負ひ、危険を負擔すると共に、之より生ずる收益を全部其手に收むることを期すること此れであります。従つて他人に雇はれ又は他人の命令指揮の下に働く人は、營業者とは申されないので。此くの如き人は、事業の一切の責任を負擔するのでもなく、又た之を主宰するものでもありません。如何に營利的の形を完備して居りましても、營利の最大眼目たる責任の負擔、全體の主宰と云ふことが缺けて居ります。故に、此等の人々は職業を營んで居るには相違ありませんが、營業者とは云へないのです。營業者とは、一切の責任を荷ひ全體を主宰する人を申すのです。是れ職業と營業との異なる點であります。

### 其の實例

例へば會社の社員銀行の行員の如き、重要な任務は帯びて居ましても、之は營業とは申せないので。社員・行員は銀行會社から云へば雇人で、營業主宰者の命令を受けて働くのであります、營業者ではありません。

ません、職業者です、即ち銀行員會社員といふ職業を有するに止るものであります。反之して如何に小さくとも、己自らの店を設け、多少の資本を以て、品物を仕入れてこれを商ふもの、小さな店を持て小間物屋をやつて居る者、煙草屋を持つて居る者、紙屋をやつて居る者の如き何れも一つの職業者たると共に營業者であります。何故なれば彼は小間物屋・煙草屋の全體の計劃を自ら立る主宰者であります。銀行員會社員の収入の多い人に比ぶれば、此等小商人の収入は何分の一にも達しないでありませうが、營業者たることは疑を容れないのです。民間の大會社・大銀行には内閣總理大臣以上の俸給を取る様な人も居りませう。堂々たる株式會社にして此等の高給者一箇年の給料だけの利益を擧げないものもありません。併し其高給者は營業者ではありません、肩書を書けば矢張り會社員と書かなければならぬのです。一箇月十圓の俸給を得る會社員も、一箇年何萬圓の収入のある會社員も同じく會社員であります。

### 職業は人の身分を定む

職業は社會上の分業から出て來たので、之によつて各人の社會上の地位を極めるものであります。一定の職業を持つて居る人は之れによつて其の身分が極まります、従つて又た其人の人格にも影響します。大臣である、大名の家令である、陸軍の軍人である、商賣人である、大工左官である、職工である、辯護士

である、教師であると云ひますと、其収入の高如何に拘らず、其の職業に關連して物の考へ方、生活の仕方、言葉の使ひ方、衣服の着方迄も違つて來ます。教師には教師相應の衣服があつて、印半天を着る譯には行きません。職人は職人でありまして、袴を穿いて大工をやることは出來ません印半天を着ます。印半天を着ると其人が印半天的になり、袴を穿けば目から袴を穿く氣分になります。職業は聽て其人の全人格を社會的に限定する力があるものです。昔の様に四民の別が極つて居つて超ゆ可からざる限界がある時には勿論ですが、今日と雖も人は職業が極まれば、聽て其人の人格なり進退なり日常の行動なりが大部分は其れによつて定められるのです。

### 職業なる觀念の由來

獨逸語では、職業のことを Beruf と申し、英語では Profession, vocation, calling 等と申します『召出された事』と云ふ意味であります。人が何々の事をせよと召出されて之を營むと云ふ意味であります。所謂白羽の矢が立つて、汝は大工となれ、左官となれ、教師となれ、官吏となれと命ぜられたと云ふ様な意であります。我邦でも此意味で職と云ひ職人と申すのも可成古いことで、王朝の末あたりから此名稱を用ひられて居ます。元來支那の字として、職とは職官・職員とか申して、常に官吏の勤めを意味したの

で、大寶令には此意味にて職員令と申すものがあります。然るに何時の頃よりか莊園制度の發達に伴つて、職讀みと一は一種の特權の事をも指して云ふ様になりまして、職の受領と申せば、特權を授けられること並に授けられた特權を行使することになりました。即ち土地を知行することを職と云ひ、之に準じて百姓の土地に對する特權を百姓職・作手職等と云ひ、又、鹽合物職・旦那職・船手職等と申します、其他宿屋も職なれば問屋も問屋職と申し、又大工職なども申す様になりました。徳川時代には職を敷又は私考へでは此の如く職を以て營業權・工業權を言表はすやうになつた結果、其の權利に基いて營業し工業を營むことを、職又は職業と云ふ様になつたことと存じます。尤も是は私一人の考へでありますから或は當つて居らぬかも知れません。兎に角、西洋でも我邦でも昔は職業の自由と云ふものはなく、或職業を營まんとするには、夫々許可を受けるか、命令せらるゝか、召出さるゝか、特權を附與せられるかするを要したものですから、職業とは其意味の文字を以て言表はしたものであらうと存じて居ります。

### 職業意識

さて今日の經濟組織に於ては一の職業には之に伴つて共通の利害關係がありまして一の職業意識が支配するものであります。而して又一の職業の内には、經濟上に於ける地位、殊に所得の種類並に多寡に

よつて、又其々に異なる利害關係がありまして、所謂階級意識といふものが支配します。此點から申せば職業には受動的・能動的の區別を認めることが出来ます。同じ一の職業でも、之が營業たる場合、殊に多額の資本を有して之を其業に投じ、従つて多額の收入を得、其収入は單に労働に對する報酬たるのみならず資本の利子を含み又企業の利益をも含んで居る場合には、此は能動的指導的の職業であります。其反對に一定の職業を他人に雇はれ其指揮の下に營み、得る所の収入は勞銀のみであつて、且つ其額も少い場合には、此は受動的の職業であります。又同じ職業でも、一生唯其一つの業許りに従事する場合と、二三の職業を兼ねてゐる場合とは違ひます。此場合には職業に主たる職業と、従たる職業とがあることになりまして、此に對する職業者利益の念には自から厚薄あることを免れません。主たる職業なれば全心を傾注して其利益を圖りますが、従たる職業になれば左迄熱心にならないかも知れません。所謂本職と内職との違ひは即ち此れでありまして、内職者の多い業に於ては、同業者の共通觀念は寧ろ乏しく、従つて一致して其職業上の利益を伸張し、權利を主張することが微弱たるを免れません。

### 職業と社會問題

所謂社會問題は、多く此の種の職業意識から起つて來ます。同じ職業に従事して居る者は互に顔を知ら

ずとも、一朝緩急があれば職業が同一なりと云ふことの爲めに其間に連絡が出来まして、一致の運動を爲す様になつて、茲に色々の社會問題が起るのであります。労働者問題の如き其最も重要なものであります。此外に所謂手工業問題とか、小作農問題とか、家内工業問題とか色々なものがあります。我邦では未だ職業意識が普及發達して居りませんから、此種の共同行動は甚だしく、従つて之より社會問題の起ることも稀であります（尤も此頃は、筋肉労働者間には労働運動も大分盛んになり、従つて職業意識も餘程進んだやうであります）。否全く無い譯ではありません、富を有し社會の表面に横行して居る者の間には、共同行動の實を見ることはありません。即ち地主が連合して地代を上げる、家主が共同して家賃を上げる等と云ふ様なことはあります。又同一營業者が連合して直段を引上げやうとすることもありますが、殊に先年の歐洲戰亂を機會として、或は紙の直段を引上げる、鐵の直段を引上げる、材木の直段を引上げる、甚だしきに至つては市内の湯屋が連合して湯錢を引上げる等と云ふ場合には、此くの如き共同行動が行はれますが其れ等は多くは不當なる實力の強制の場合でありまして、國民經濟の健全なる發達の上から見れば無い方が宜しいものに屬します。健全なる共同行動の方は却つて甚だ微弱であります。畢竟眞正なる職業意識が我邦に於て發達して居らぬ證左と云ふ可きと存じます。西洋文明國に於ても、能動的職業者殊に營業者たり企業利益の收得者たるものは容易に共同行動を致しますが、受動的職業に於ては其れは中々六ヶ敷いのであります。

有職者と無職者

であります。

營利といふ點から見ますと、國民は二大別して、營利國民と非營利國民とに分つことが出来ます。即ち營利行爲を常習的に營んで居る所の階級と、さうでない階級とに分つことが出来ます。又職業の點からも職業のある者となない者即ち有職者と無職者との區別はあります（我邦の職業統計では、世帯主たると家族たるを問はず、凡て職業を有つて居る者を本業者と稱へ、本業なき家族其他を従屬者と名づけ、収入によりて生活する者と全く何等の職業を有たざる者を無職業者として居ります。又他人の世帯内に在る家事使用人は其主人の職業に屬するものと認めて居るのであります。又同じ無職者の中にも一時的無職者と繼續的無職者とを區別する必要があります。一時的無職者を更に分て任意無職者と不任意無職者とすることも出来ます。自ら好んで自己の都合便利の爲めに一時無職たる者は任意無職者であります。職業がなくては困るけれども適當の職が見當らない、又は従前雇はれて居た所から解雇された如き者は不任意無職者であります。之を失職者或は離職者と名づけて、社會問題上重要な研究を要するものであります。大正九年の國勢調査の結果によれば、我邦總人口中有業者は四割八分五厘を占めて居ります。諸外國の割合は

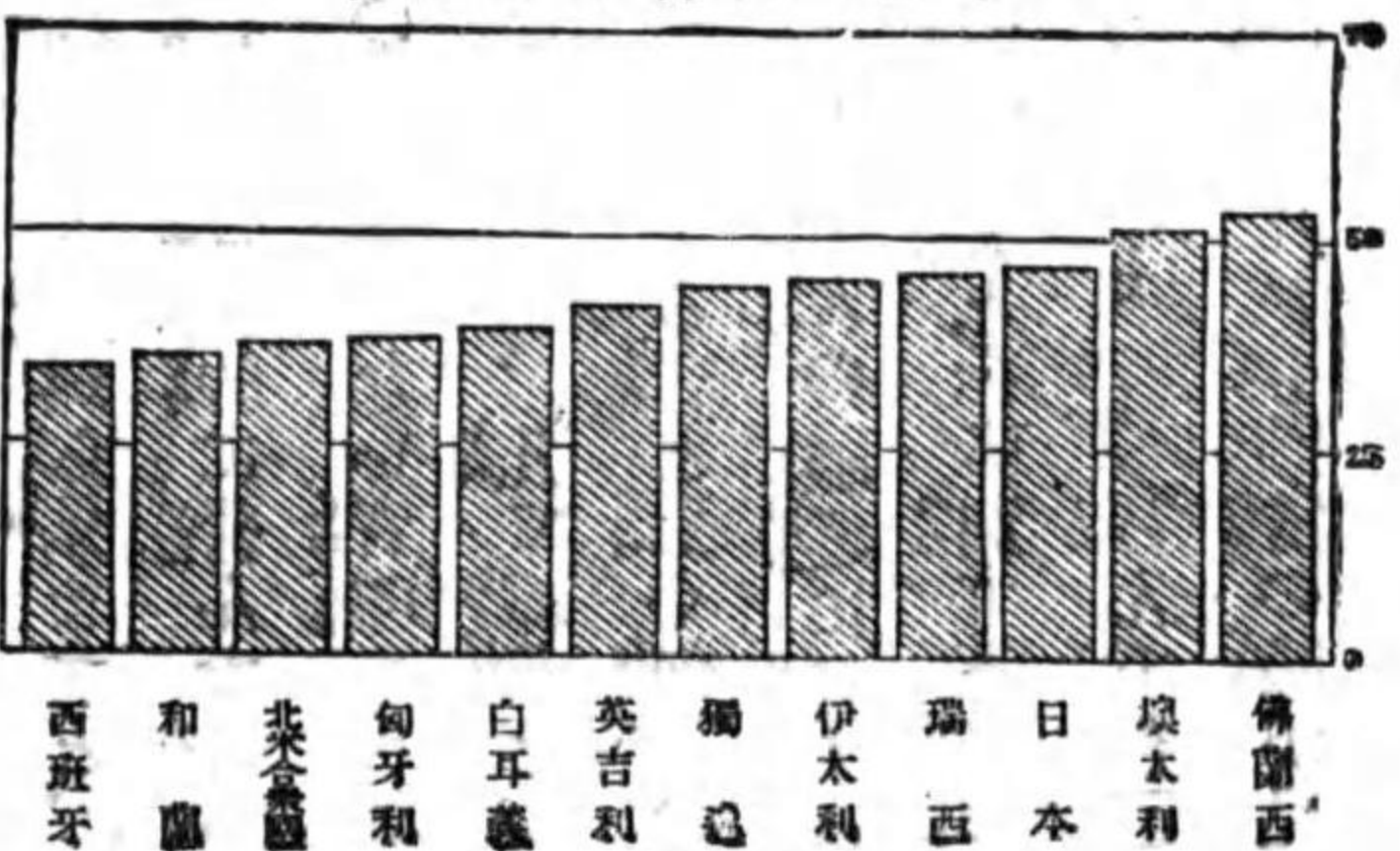
日本より多いものは佛(五割三分四厘) 奥(五割二分三厘)で、瑞西・伊・獨・英・白・米・蘭・西等

は日本より割合は少いのであります。統計局刊行の『抽出方法に依る第一回國勢調査結果の概観』三四―三五頁にある(第七圖)を上に掲げて御目にかけます。

### 職業統計

斯くの如く國民經濟内に於ける主體の職業の分布・性質・種類といふものは、重要な關係があるものでありまして、國民經濟の狀態を知らんと欲せば、其内に存在する職業の種類、之に従事する國民の分布等を是非知らねばならぬのであります。又た國の生産の狀態は此の職業の分布によりて定められるものであります。流通も亦然りであります。而して社會問題の重要が大となるにつけては、殊更

各國人口中百有業者



職業の狀態を十分に且つ正確に知らねばならぬのであります。故に文明諸國に於ては職業の狀態を統計的に調査するを怠りません。即ち所謂職業調査なるものを行ひます。此に二様あります、一は第一次的調

査(獨逸語で Primäre Ermittlung)、二は第二次的調査(同 Secundäre Ermittlung)と申します。

或は専門調査と附帶調査と申しても宜いのです。即ち殊に職業文を調査する爲に全國に涉つて調査員を派遣し調査票を配布してやるのが、専門調査又は第一次的調査で、此れは獨逸でやつて居ります。之に反し一般の人口調査(我邦では國勢調査とも申します)の序に職業調査を兼ねてやるのが、附帶又は第二次的調査でありまして、米國其他の國でやつて居るものは是れであります。我邦では大正九年十月一日に行はれた國勢調査に於て、人口調査と同時に兼ねて、職業調査を行ひました。其結果は、昨大正十二年になつて、先づ東京市の分が可なり詳しい報告書六冊となつて公にせられ、續いて統計局からも府縣分けの分が、京都府を初め二三刊行せられました。全國に亘るものはまだ前途遼遠と存じます。其が公になりますと我々は始めて稍正確に日本國民の職業分布の實況を知ることが出来るでございませう。今日未だ其が出来ないのは如何にも残念な次第であります。唯幸などには、本書改訂中刊行されましたものに『抽出方法に依る第一回國勢調査結果の概観』と云ふ百頁斗りの小冊子があります。これは總世帯の千分の一を抽出して概要を推算したものでありまして、我々は之れに依つて、茲數年間假に用ひ得可き稍正確な數字を與へられた次第であります。

### 國民の職業別

さて職業調査に於ては職業の種類別を正確にすることが最も肝要であります。萬國統計會議では各國が區々の種類別をして居ては國と國とを比較することが出来ないで效用が薄いからとて、數回の會議に於て各國の當事者が首を鳩めて種々研究したのであります。其結果として、世界共通の職業別としては凡そ次の如くするが宜しからうと云ふことになつて居ります。即ち先づ大別けとして四種に分ち、更に之を十二の中別に致し、其以下は之を五百の小別に致します。亦職業者の地位を 一 雇主 二 使用人 三 労働者の三つに分け、更に亦全體を通じて、嫁ぎ人と家族とに分けます。家族にも、亦助業家族と無業家族とを分つ國もありません。更に亦本業と副業とに分けることもあります。右の内、大別と中別とを擧げて見ますれば左の通りであります（小別數は數が多くて煩はしいから略します）。

萬國統計會議決議職業別表

大別 中別

- (一) 原始生産業
  - 一、農業（漁業・狩獵を含む）
  - 二、鑛山業
- (二) 加工及運轉業
  - 三、工業
  - 四、交通業
  - 五、商業
- (三) 公務及自由職業
  - 六、武官（警察官を含む）
  - 七、行政官
  - 八、自由職業
  - 九、財産収入により生活する者
  - 十、僱婢
  - 十一、職業を申立てざる者
  - 十二、不生産的職業者並に職業詳ならざる者
- (四) 雜

此の別け方は未だ改良の餘地があるものとして、更に調査を加へることになつて居ります。而して各國の實際は未だ此の案を採用することにはならず、各々自國丈けの種類別けを採用致して居ります。即ち獨逸の千九百七年の職業調査では職業の大分類を 一 農業（園藝・牧畜・林業・漁業を含む） 二 工業（鑛

業・鹽業・建築業を含む) 三 商業 (交通を含む) 四 僕婢 (理髮師其他人に關する業及定りなき賃銀労働を含む) 五 官公吏及自由職業 六 無職及無届者の六種として、更に之を二十六の中分類、二百十八の小分類に分けて居ります。英吉利の千九百十一年の職業調査では、大分類を二十二、中分類を八十、小分類を四百八十五として居ります。米國千九百十年の調査では、大分類九、中分類百五十四、小分類三百八、伊太利の千九百十一年の調査では、大十二、中五十三、小三百十としてあります。

### 我邦の職業分類

我邦では、臺灣の戸口調査大正四年度分に於て、餘程進歩した職業調査を行ひまして、種々詳細な出版物が出て居りますが、其分類は大六、中三十三、小百七十八としたのであります。臺灣は内地とは聊か趣きは違ひますが、然し大體に於て我々の研究に參考となる點が甚だ多いのであります。東京市の調査の分類は大六、中三十五、小二百三十八としてあります。此二者は何れも嘗つて統計學者の相原重政氏が立案せられたものに基いたらしいのであります。相原氏は大六、中三十六、小百八十一の分類を設けられたのであります。其は實行されずして居るのです。神戸市・熊本市等の調査も殆んど悉く之れに依つたものであります。相原氏の原案は右の世界共通案や、英・米・獨等の實例を參酌せられたものらしいのであります。

であります。

### 第一回國勢調査の職業分類

大正九年十月に行はれた第一回の國勢調査 (但し朝鮮支は施行しませんでした) に於ては、大分類十、中分類四十一、小分類二百五十二であります。之を従來の分類に比べると、慥かに進歩したもので、綿密な研究の結果たることは疑ひを容れないのであります。但し細目に至つては、無論批評の餘地はあります。右の内大中分類を次に掲げ、下に東京市の比例數を掲げて御參考に供しませう (小分類は省きます)。

大分類	中分類	東京市 (百分比)
一、農	一、農作・畜産・蠶業	〇・八八
	二、林業	
二、水産	三、漁業・製鹽業	〇・一一
	四、探礦・冶金業	
三、鐵業	五、土石採取業	〇・三一
	六、窯業	
	七、金屬工業	



四、工

業

- 八、機械器具製造業
- 九、化學工業
- 十、纖維工業
- 十一、紙工業
- 十二、皮革・骨・角・羽毛品類製造業
- 十三、木・竹類に關する製造業
- 十四、飲食料品・嗜好品製造業
- 十五、被服・身の廻り品製造業
- 十六、土木建築業
- 十七、製版印刷製本業
- 十八、學藝・娛樂・裝飾品製造業
- 十九、瓦斯電氣及天然利用に關する業
- 二十、其他の工業

三七・二七

五、商

業

- 二十四、物品貨貸業・預り業
- 二十五、旅宿・飲食店・浴場業等
- 二十六、其他の商業

三〇・六四

六、交 通 業

- 二十七、通信業
- 二十八、運輸業

六・三二

七、公務・自由業

- 二十九、陸海軍人
- 三十、官吏・公吏・雇傭
- 三十一、宗教に關する業
- 三十二、教育に關する業
- 三十三、醫務に關する業
- 三十四、法務に關する業
- 三十五、記者・著述者
- 三十六、藝術家
- 三十七、其他の自由業

一一・六八

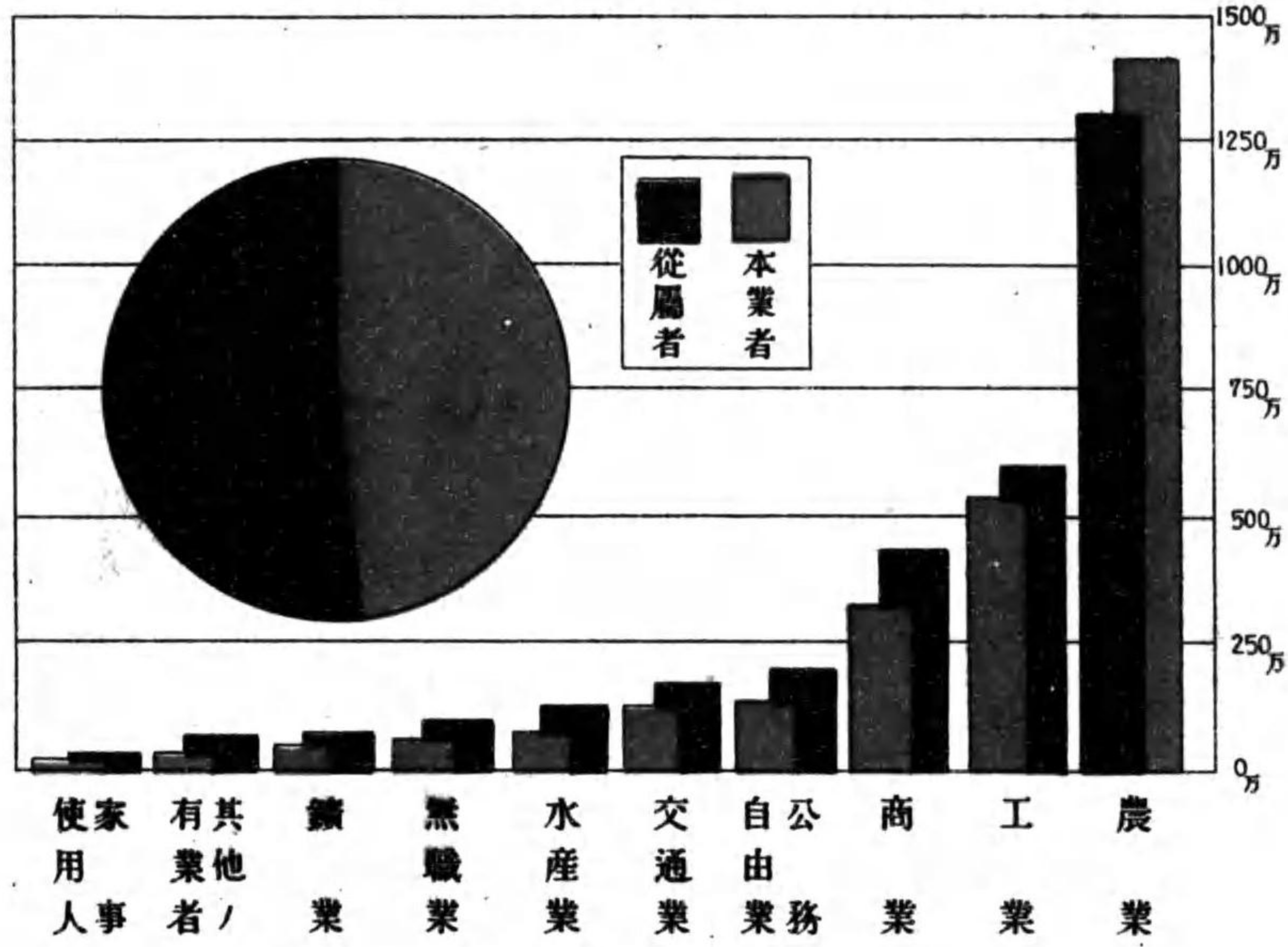
八、其他の有業者

- 三十八、其他の有業者

二・一〇



口人別業職ノ邦本



全體では業主は三割五分、職員六分、勞務者五割九分でありませんが、家事使用人と無職業、公務自由業の三者は事體が違ひますから別として、其他では、商業に於て業主の割が一番多く鑛業に於て一番少いのを示して居ります。反對に勞務者は鑛業に多く商業には少いのであります。

第四編 企業・土地及人口

計	無職業	家事使用人	其他の有業者	公務自由業	交通業	商業	工業	鑛業	水産業
三三・三	一〇〇・〇	一〇〇・〇	三・五	二四・八	二三・六	五二・九	二五・四	三・〇	三三・三
一・四	—	—	一・八	五二・五	一三・八	一三・四	五・八	七・一	一・四
六五・三	—	—	九四・七	二二・七	六二・六	三三・七	六八・八	八九・九	六五・三
一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

## 助業家族

次に一寸御話をして置きたいのは、均しく有業者と稱せられるものゝ内に助業家族（手傳）を含むとあります。例へば夫の業を助ける所の妻、父の業を助ける所の息子息女等を助業家族と申します。之は丸で遊んで居る譯でないのですが、又た別に賃銀を貰つて居るのでもありません。即ち職業者として獨立して居る者ではないのです、家長の職業を助ける者です。さてこの助業家族と共稼とを混同してはいけません。家族であつて別に夫々職業を持つて居て、幾らか宛の賃銀を得て來るこれは共稼であります。妻は妻、息子は息子、娘は娘で各々別々に働く、父は人足をして居る、母は土方をして居る、息子は植木屋をして居る、娘はマツチの箱を張つて居る、さうして父の生活を助ける、此が共稼であります。一つの生活を助ける爲に色々な人が色々な職業に従事して稼いで居るのです。助業家族は何れも家長の職業を助けるのです。従つて稼ぎ人は其家長のみで、妻でも子供でも大變骨を折るけれども稼人とは看做されないので、故に家長たる稼人がなくなると大抵の場合には家族は何も出來ないので、即ち家長其人を中心として居るからです。

無職業者問題

茲に問題の存するのは無職業者です。無職業者には無職にして而して活計の道のない者と、其の正反對に無職だが活計に少しも困らぬ階級とがあります。是は兩極端であります。例へば土地を持ち公債を持つて居て其収入が澤山ありますから何も爲すに居る、これも無職業者です。何の貯へもないが又何の職もなく、其日々々に困つて居る人も無職業者です。此二つの者を同じ階級に入れるのは甚だ妙ですが、職業の無いと云ふ點から云へば性質上同じですから、獨逸の如きは之を一の種類に入れるのです。世界共通案では、これは公務及自由業の中へ入れてありますが、我邦の職業分類では、無職業の内容は左の如くにしてあるのであります。

大分類	中分類
無職業	収入に依る者
	一、小作料に依る者
	二、地代・家賃・有價證券の収入に依る者
	三、恩給・年金・其他の収入に依る者

無職業

- 一、準世帯に在る學生・生徒
- 二、精神病院・感化院等に在る者
- 三、官公又は慈善團體等の救助を受ける者
- 四、在監人
- 五、其他の無職者

(一)、無職業と記入したる世帯主 二、職業を申告せざる世帯主 三、準世帯に在る無職業者)

處が無職業者の中には、精神病院・慈善病院の患者・慈善團體の救助を受ける者・監獄の囚人・其他の無職業者（浮浪民・博徒・乞食等も之に屬します）等があるのです。つまり社會の最高位にあるものと、最低の所謂ドン底生活をするものが一緒になつて居る譯です。華族・貴族・富豪・高官から退隱して莫大な恩給年金を戴いてブラリ／＼と、一日を暮すに困る位樂な人々と、以上にあげたドン底生活者とを一緒にすると云ふことは、社會政策の目から見ても、少々可笑しいのであります。有業者でないといふ點は兩者同一でありますが、一方は社會政策上押へることの必要なもの、他方は反對に之を引き上げてやらねばならぬもの、其割合がドレ程あるかを一目の下に知ることは、社會政策上甚だ肝要なことであります。其れを無職業と云ふ中分類の下に一括することは果して如何なものでありませうか、寧ろ萬國共通案の様

に財産収入者を自由業に属せしめて、ドン底生活者と別にした方が善くはありますまいか。又た單に職業別と云ふ立場から申しても、収入の源の最も豊富確實で、且つ其の爲めに何等の職業を持たぬものと、職業もなければ、他の収入の源もないスツカラカンの無職業者とを一緒にすると云ふことは、折角四十にも分類して、夫々の職業の分布の有様を知らうとする、抑もの趣意と一致しないことではないかと存ぜられます。但し或は社會主義者の様にドン底にある無職業者も、財産階級の特権者たる無職業者も、共に労働者から見れば蔑む可きものである。労働本位たる可き社會に取つては、兩者は均しく敵であるといふ立場から申せば、此兩者を一括して一の中分類に入れることは、却つて皮肉的に面白くもあり又痛快な意味のあることとせう。然し我政府が左様な皮肉を企てられるものとは一寸考へられないのであります。然し又た一面から見ますと、此兩者は共に無職業と云ふ重大な共通點を持つて居ることは、大に注意すべきことであります。此の無職業者の數が一國に多いと云ふことは甚だ憂ふべきことであります。生活に困らず樂に財産収入で生計を立て得るから無職業者なれば、何も憂ふことはないと思しますが、其は其當人から見れば無論左様に相違ありませんが、國民經濟の立場から申すと、此種の人が増えるのは、其れだけ國の生産が減する次第でありますから、決して善いことではありません。況んや無職にして生計に困るもの、數が増えれば、貧民窮民が増えることでありまして大いなる憂であります。

### 助業家族の獨立傾向

次に又た助業家族が段々外へ出て家長の職業以外に夫々職を持つて、共稼ぎ助稼ぎ内職を致すやうになつて來ることも重要な問題であります。婦人労働問題なるものは、主として此點から考へなければなりません。夫のない婦人が段々助業者の地位を脱して獨立の本職業者となつて、婦人職業者の殖えることは文明國の大勢であります。獨り其れに止まらず夫ある婦人が家庭を他處にして外へ出てで職業に就くことは大に慎重に研究す可き現象であります(獨身婦人並に有夫の婦人が助業家族として働くことは昔からあつたことです。今日の婦人職業問題とは、婦人が此の助業者の地位から獨立の本職業者となることを云ふのです。婦人は昔から單に家庭の内助者・消費者たる計りで、少しも生産に干與しなかつた様に論ずる人もありますが、其は事實に反した謬想であります)。此が爲に多數の労働者の家庭に悲惨なる状態を持來し、地位の改進黨を困難ならしめる虞が多くあります。

### 婦人賃銀は何故に低きや

抑も工業上に於ても又精神的職業の上に於ても、婦人の得る所の報酬は男子の得る報酬よりも少いとい

ふことが各國實際の通例であります。少いと言つても、僅に少いのもあれば非常に少いのもあります。如何に婦人労働者の運動があつてもこれ計りは中々直らないのです。今日は工場法が出来まして特別に婦人労働者を保護します。成年男工に付ては時間の制限は千九百十九年米國華盛頓開催の國際労働會議で八時間労働を決議する迄は、大抵の國の工場法には規定してなかつたのです。特別に危害を及ぼし衛生上危険なる箇處に限つては除外例がありますが、原則としては成年男工の方は時間は無制限でありました。何となれば成年男工の方は嫌ならば働かない丈のことであるといふ原則を取居るのです。只瑞西・奧太利・濠洲等に於ては成年の男工に付ても以前から時間の制限をして居りました。其の外に英吉利でも佛蘭西でも獨逸でも成年男工に付ては時間の制限はありません。然るに婦人と未成年の労働者には必ず時間を制限してあり、又た夜業に使役するを得ずとなつて居ります。處が日本の工場法も婦人の夜業は禁止する主義でありましたが色々譲歩をして謂ゆる骨抜になつて夜業に使へる様になりました（幸にも、大正八年國際労働會議の決議によつて、婦人の夜業は我邦では廢されなければならぬことになりました。大正十二年三月法律第三十三號を以て工場法第四條は改正致され、十六歳未満の者及女子は午後十時より午前五時に至る間に於て就業せしむることを得ずと定められ、其除外例實は骨抜規定たる舊第五・六の兩條は削除されたのであります。トコロが、此の改正を實行するに必要な工場法施行令の改正が、案はチャンと出来

て居るにも拘らず、政府の怠慢によつてぐすくになつて居り、従つて右改正工場法は今に（大正十三年九月）未だ施行せられて居ないのは、如何にも残念なことであります。善事にのろいことは我政府の特色と思はれます）。

工場法本來の精神は婦人労働者を夜業に使ふことを禁ずるのです。此くの如く時間に就ては婦人と未成年者に對して保護を加へて居りますが、其受くる所の賃銀に付ては保護を加へて居ません。従つて婦人の賃銀は男子の賃銀より低くとも如何ともすることが出来ないのです。さて何故女の賃銀は、男子の賃銀より少いのでせうか。或は女の働きは男の働きよりも鈍いからと申す人もありませう。又た同じ働きをするにしても婦人には色々故障が多い、男子の様に數十年間を繼續してやることが六ヶしい、病氣に罹ること多い、其内には出産といふこともあり、色々故障が多いから男子と同じ賃銀はやれぬのだと申す人もありませう。此も無論事實でありませう。乍併男子と全く同じ働きを爲し同じに役立つ婦人であつても、其賃銀は男子より低いのが常であります。此は何故であるかと申すと、其は婦人の職業が助稼であり、補助的性質を帯びて居るからで、獨立本業として従事する様になつても、内職並にしか賃銀を呉れないからであります。

婦人の職業は補助的と看做さる

抑も婦人の職業は助稼として認められたのが始めであります。今日は最早其實はなく獨立の本職業者が多くなつて來ました。然るに賃銀の點に至つては、不尠變補助者並に取扱はれて居るのです。人の妻、人の娘、家に居つて夫又は父兄の稼ぎに依て生活はして行けるのですが幾分か家計を助けたいから、何處か工場で使つて貰ひたいといふ、此れが婦人職業の起つた始めであります。元々幾分か父兄の生計を助けさへすれば宜いのですから一人前の賃銀を要求しませぬ。食へるに困りはせぬ、食へるだけはある、或は小使さへあれば宜い、或は多少貯蓄が出來、衣服の一枚も出來れば宜いといふのであります。我邦の紡績工女・製絲工女といふ者は今でも此性質を脱しませぬ。始から生涯之に従事する積りでやつて居るのではありませぬ。二年か三年嫁入前の修養の爲に若くは婚姻の費用を助ける爲に働くのです。即ちホンの一時の腰掛仕事であります。所が男子は己の働きを以て己を養ふは勿論概ね家族を養はねばならぬものです。従つて男子の賃銀は己と家族とを支へ得るに足るだけの程度より下に落ち得ないのです。若し其以下に賃銀が下れば生きて行けないのですから、自から左様云ふ職業を求め人の數は減ります。其結果賃銀は上つて、兎に角一家を支へ得る丈けまでは早晚上るのが例であります。兎に角男子の職業といふ者は一家を

支へるに足りない場合もありますが、本來の趣意はそれを以て一家を支へるにあるのです。今日に於ては其れが足りませんから妻が共稼をすることが殖えては來たのですが、原則としては男子に於ては、職業といふものは己と己の家族を支へる爲めに營むものでありまして、従つて賃銀も之に準ずるのであります。婦人職業はさうではありません。支ふ可き家族を有する者も無論ありますが無い方が多いのです。殊に我邦の婦人労働の大多數を占める紡績工女・製絲工女は獨身者であつて家族を支へる義務を持たぬものが大部分であります。自分丈け喰へれば跡は小使位あれば宜しいと云ふ者であります。従つて其賃銀の多寡は一家の運命に關することはありませぬ、男子の職工に取ては一日の日給が五錢減る十錢減ると己の家計費がそれだけ足りなくなるのであります。餘り減れば一家の運命に關する死活問題となります。従つて場合によつては全力を注いで争はなければならぬこととなりませぬ。婦人労働者の得る所の賃銀は其一部を除く外は餘程伸縮力を持って居ります。あればあるに越したことはありませんが、無ても宜い場合もあります。従つて賃銀が安いからと他へ移るとか、死力を出して引上げに勉めるとか云ふことはありません、争つても婦人のことですから中々勝てません、十年前二十年前に定めた賃銀の規定が其儘残つて居たり、不法に安い賃銀を當がひ扶持にせられても甘んじて居ります。さて斯の如き助稼・共稼の婦人労働者が殖えますと男子の業が奪はれます。男子を雇へば一家を支へるだけの賃銀をやらねばならぬ所へ、仕事は簡單で



あれば女子を代りに使ふ方が雇主の方は得であります。賃銀は四分の三とか半分とかで済みますからドン／＼男子の労働者を驅逐して女子労働者を使ふ様になりました。男子労働者が折角骨を折つて上げて来た賃銀が競争によつて又々下落することになります。これは婦人労働の問題たるに止まらず、労働者全體に取つて重大な問題であります。

### 低級労働の競争

今日の發達した經濟組織に於ては、各職業階級は共通の利害關係を自覺し、職業意識によつて共同行動を取るものなることは既に述べましたが、右の如き婦人労働の増加によつて男子労働者階級が壓迫を感じ之に對抗する力も亦た強くなりました。之と同じ様な事は、低級男子労働者の競争によつて職業を奪はれ其安全を脅かされるゝ場合に起ります。米國西部に於て日本人を排斥するのも主として此爲であります。米國の排日運動には人種問題もありません。國際關係もありませうが、カリフォルニア其他に於て日本の労働者が排斥せられる主要の原因は、日本人の労働者は安い賃銀に甘んじて働くことは是れであります。丁度男子に對する女子の様に日本人は米國人歐洲人よりも賃銀は少く安く働きます。斯の如き安い労働者がド／＼／＼殖えて参りますと、今迄高い賃銀を取つて居る米國の労働者は驅逐せられて職業がなくなります。

又た亞米利加に於ける一般の労働者の賃銀が下落する傾向を生じます、それは日本人が這入つてくるからだと言つて排斥するのであります。此點は誠に無理のない事で、我々とても米國の労働者であつたら同様の考へを抱くことゝ存じます。米國の労働者から言へば一の自衛運動であります。彼等が自分の立場から打勝ち難い所の敵が襲來して來たと考へて、之を排斥することに力を盡すのは大に諒とす可き點はあります。

### 職業に取つての大問題

斯の如き助稼ぎ共稼ぎをなし、安い賃銀を以て働く婦人なり低級労働者なり、又未成年労働者なりが段々殖えるといふことは、成年男子の職業に取つては容易ならぬ問題を惹起するのであります。殊に助稼ぎや共稼ぎといふものは、同じ職業であり乍ら營利的の要素は甚だ少いのであります。人に雇はれる職業は營業ではありませんが、其れにしても男子の職業は營利的要素が非常に勝て居ります。男子は其職業に依つて己の一家を支へて行けるだけのものを得て行かなければならぬのです。それにはどうしても一人前の働きをする、或は人より餘計な働きをして一圓でも五十錢でも多くの収入を得たいと努めます。従つて労働の能率が高まつてくるのです。

安き労働は却つて高し

西洋に於ては労働賃銀が高し、我邦に於ては賃銀は安くあります。所が一部の論者否な多くの論者は、此點を以て日本の大なる長所だと考へて居る様ですが、其は飛んでもない謬想であります。賃銀が安いと安くとも、安からう悪からうで働きの鈍いことを知らねばなりません。半分の賃銀で働くことは働きますがその代り仕事は三分の一しか出来ないならば結局損になります。日本の労働者は大抵左様であり、社會改良に依て労働の能率を高める爲には労働の報酬の殖えるといふことは已むを得ないことであります、否歡迎す可きことであります。必竟我邦の労働者には未だ營利の觀念が徹底して居らないのです。

根本的の憂

抑も營利的要素の乏しい助稼若くは共稼が殖えてくることは今日の社會の根本的の憂であります。世の中をスツカリ變じて仕舞つて營利を驅逐して仕舞ふといふ社會主義の主張通りになるならば、或は其れでも宜しいかも知れませんが、それは出来ないことであります。社會主義者の言ふことは議論としては一應面白くはありますが其實行の見込は立ちません。我々は現状維持といふ立場から考へなければならな

いと存じます。無論營利といふことには澤山の弊害はあります。此點は十分に考へに入れなければなりません。乍併弊害があるから營利と云ふことを丸で止めて仕舞ふといふは、恰も病氣は多く食事からくるから飯を止めて仕舞へ、物を食べないで居れと申す様なことになります。食事をしないで確かに生きて居られるなら其も宜しいでせうが、其見込の立たないのに絶食實行は出来ません。我々は營利の弊害は飽迄之を杜絶せしめ健全なる發達を進むることは圖る可きだと存じます。此點が社會主義と非社會主義との分れる一番肝腎な所であります。社會主義は營利主義を廢して仕舞へと申します、我々は廢し度くも之れは不可能であるから、其の弊を去ると共に其長所は何處迄も之れを助長せねばならぬと主張するのであります。兎に角今日の經濟組織の根本的性質は營利的であるといふことはどうしても認めなければならぬのです。而して生産並に職業は常に營利に影響せられ其支配は受けて居ります。今日は生産と言はぬでも、營利と言へば其中に生産は這入つて居ります。全く營利の無い生産は殆んどない、有つても其は餘程考へものであります。左様云ふものは多くは不健全なる要素を含んで居るものであります。

營利の得失

營利には澤山の弊害があります、其の極端な例は取引所の如きものに於て能く表はれて居ります、殊に

此頃の様子に成金とか申すものが澤山出来まして株の取引所が大繁昌すると云ふ状態は、社会主義の攻撃も更々無理ならずと思はしむる醜態を暴露して居ります。乍併又反對に今日に於て營利の觀念が乏しい爲に起つて居る弊害を列擧致したならば是又た澤山あります。日本の商業道德が低いのはまだ本當に營利主義が徹底して居らぬからであります。本當の營利主義が徹底して居れば直に壞れる様な物を賣る氣遣はありません。儲詰の中へ石塊や砂利を入れては二度と注文の來ないとは分つて居ります。一度にウンと儲けて二度目に注文がなければ結局損であります。本當の營利主義から言へば善い物を作つた方が得です。英吉利人の謂ゆる正直は最上の商略なりとは、其事と思ひます。道德を安い高いの算盤上で弾いたり正直を一のポリシーとして守る等とは誠に厭なことでありまして、我々は左様いふ英吉利の素町人的思想には反對であります。併し不道德よりは算盤的でも道德の方が宜いではありませんか。正直は最上の商略なりといふのは今迄の日本人の思想より言へば賤しむ可き思想であります。左様申せば時は金也といふ言葉なども俗悪極る思想であります。昔の日本人ならば時は刀也とでも云ふ所でせう。今日の日本人が左様な俗悪な西洋人の言葉を口眞似して喜んで居るのは西洋かぶれの弊とも云へますが、併し又た一面には此言草は營利主義の立場を能く言表はしたものであります。營利主義になるからには徹底した營利主義でなければ駄目です。營利に従事し乍ら營利主義を徹底しない小賣商人には随分弊害があります。僅かな利

益で以て一家數人の糊口を圖らなければならぬのが小賣商人の通例です。進んで營利的の事業を擴張する資本を持たず能力を持たず、其日々々々を胡魔化して行くとなると極端な悪い事をする様になります。今日に於ては營利主義の徹底したもの程品物も安くなつて行けば取扱ひも可憐になる有様です。此が商業道德の發達した文明の營業職業の真相です。日本の輸出工業などもまだ營利主義が十分徹底しない小規模のものが多くあります。露西亞から澤山注文を受けても、其注文の半分をも送り出す力が日本にないのです。而して如何はしい品物を供給して直ぐに非難を招きます。我邦の商工業はモツと打算的に營利的にして掛らなければ十分なる發達は望まれません。

### 營業と家計の分離

併し此く申しても、決して營利主義を以て萬事とするのでないことは勿論であります。人間は營利萬能の動物ではありません。營利事業を営む時は營利主義で徹底すると共に、營利を離れた生活に於ては人間の高尚なる性能を十分に發揮しなければなりません。然るに營利主義の發達して居らない所では、營利と非營利と別の境界に置くことが大變六ヶしいのであります。家計と營業とが始終減茶々々に混淆されて區別が立ちません。自分が住んで居る所で商賣をして居る、店の爲に使つた金も家計の爲に使つた金も收支

曖昧になり、店に使つて居る小僧は商賣の爲め許りでなく、臺所の用も手傳ひ子供のお守りもする八百屋の使もすると云ふ有様で、却つて商賣の方はお留守になることを免れません。然るに營利の觀念が發達して家計と營業とが儼然分離して参りますと、營業は何處までも營利的で之に従事する時には全く營利主義に支配され、働く事務員も營利主義でやります。其代り一たび營業所を離れて家族の間に入れば、家族の間には少しも營利の考へを混入しませんから能く其神聖を保つことが出來、本當の家庭的な生活が送れます。我邦今日の小賣商業等ではいつ營業が終るか分りませぬ、夫婦が子供と差向ひで奥で御飯を食べて居るとお客が來て品物を見せると申します、安心して御飯を食つて居れぬから、子供を抛つて置いて夫婦共店にきて御客の相手をする、其内に食物はまづなくなつて仕舞ひます、猫が來て魚を食つて仕舞ひ子供は喧嘩をすると云ふ有様では、家庭的な生活は滅茶々々であります。さうして商賣の方も十分に行きませぬ。國民經濟が發達するほど、家計と營業とが分離す可き傾向を持つて居ります、日本の商家の使用人、工業労働者の働きの鈍い重なる原因の一は、まだ十分に營利主義に徹底しないことは是れであります。

所謂家庭主義却つて弊害多し

此道理を無視して、我邦の労働問題は西洋の労働問題の様にならぬ、何となれば労働者と雇主の關係は

主従的である家庭的である、西洋の様に権利義務的でない、此は日本の長所である杯と唱へる論者も大分ある様ですが、此れは甚だしい考へ違ひであります。小さな工場で三人五人を使つてゐる所では家庭的にもやれませうが、大きな紡績會社・製絲會社が果して家庭的でありますか、工場の主人は工場で使つて居る者の名前も知らず、何處から來て居るかも知らず、逃亡しても知らず死亡しても知らずと云ふ有様では、主従の情誼も家庭的温情もあつた譯ではありません。それを家庭的であると申すは丸で事實に反したことであります。家庭的にするのは宜いと致しても如何して家庭的に致しますか、出來ない相談であります。五百人千人の人を使つてどうして主人が一々顔を合せて家庭的の情誼を保つことが出來ませうか。其を無理に家庭的に解決す可し杯と申し、甚だしきは工場法の實施に反對する等とは甚だしい謬想であります。今日の實情は少數の人を使つて所謂家庭的に經營して居る工場は却つて工女虐待等を盛んにやる所でありませう。關東地方の機械工場の如き所で、工女が虐待に耐へず逃出して東京へ來て巡查に捕へられて又跡戻しされる等の例は、絶えず新聞紙上で見る所であります。朝から晩迄使はれて箸の上げ下ろしに此言を言はれて、寝る時間は五六時間しか與へられぬ、偶に逃げ出すと警察官が捕まへて説諭(何を説諭するのか分りませんが)して元へ戻します。骨を折て地獄の鬼の手を逃れて來た者を捕まへて又地獄へ追返す勞を警察官が取つてやります。其位ならば警察官の居ない方が宜いのです。工場を保護しなければならぬ最も家

庭的の者、中には貰ひ子養女にしてある者を却つて他に見られない虐待を致す、それが最も好い反證では  
ありませんか。日本では家庭關係を利用する時には兎角悪い目的に使ひます、人の娘を貰つて養女の名義  
で醜業婦にする。最も善い利益を占め様とする時は養女にする、養女になれば逃げることは出来ぬ、逃げ  
ても國家が骨を折つて捕まへて呉れます、親の爲めとさへ云へば他の口實で許さぬ者にも醜業を許す杯と  
實に可笑しな話であります。さういふ家族的關係の濫用は斷然止めなければ文明の進歩は望めません。反  
對に家族的關係の良い所は益々之を發揮するに勉む可きです。

### 家庭より營利を遠ざくること

それには兩者の境界を嚴重に立て家庭的な生活から營利といふ分子を全く驅逐して、之を非營利經濟とし  
なければなりません。非營利經濟は決して不經濟ではありません。第一編に申した通り今日の經濟は家計  
經濟でも矢張り餘利を目的とす可きものです。併し其餘利はいつでも金錢價値に現はれた餘利ではありま  
せん。人生を進める價値・倫理的價値・心理的價値・學問的價値・道徳的價値の餘利であります。貨幣價  
値の餘利は之を營業に於て之を職業に於て營利行爲を營んで得て、さて之を家族經濟へ持ち來つて使ふ上  
に於ては、無論金錢上の收支適合を圖り、貨幣價値の餘利を残す様に勉むると共に、更に進んで其使用に

よつて人生を向上せしむ可き價値の増進を圖ることは家族の生命であります。

### 職業の眞使命

之を要するに職業は畢竟此の高級價値の増進を圖る點より見れば、一の手段に過ぎないのであります。  
職業化することは卑しいことの様に考へられ、藝術の職業化・趣味の職業化・政治の職業化等と申すと其  
の墮落を意味する様に用ひられます。是れ畢竟營利の觀念を離れて別に高き使命のあるものを悉く營利  
化するより來る墮落であります。職業其物は決して卑しいものではありません、否職業は職業として神聖  
なる可きものです、唯其無用なる延長や濫用が卑しむ可きなのであります。此意味に於て、生産は始めに  
して消費は終なり、經濟の最高段は家族の消費にありと申すのであります。其れが厚生増進の最後の任務  
であります。而して此く家族の神聖と獨立とを維持する爲めには、今日我々は皆職業を有し營業に従事し  
て先づ生産を勉む可きであります。此が職業の眞正の意義であります。

## 第十七章 企業の意義及任務

營利生産の主宰者並に責任者

以上今日の國民經濟に於ける生産の意義を説明して、主として市場生産であることを御話し、續て此の市場生産は營利的に經營せられるもので、各人は人格の自由と私有財産制度の前提の下に、其々職業を持つて此の營利的市場生産に従事するものであることを申上げました。而して國民經濟なるものは一の主體なき組織であつて、國民經濟内に行はれる生産は、何れも各單位によつて創意せられ實行せらるゝものであることは、前論の説明を御記憶あることゝ存じます。

さて、此營利的市場生産の創意者たり主宰者たり責任者たるものは企業であります。企業は國民經濟の中にあつては生産の動因でありまして、經濟生活の生命たる計劃は、今日に於ては其源を企業に發して居ると申しても大過なき有様であります。故に今日の經濟組織を稱して企業中心經濟と申すことも出来ません。所謂資本主義又は資本制社會とは即ち其意味であります。

企業は生産の根本動力

今日の生活に於ては企業を離れて生産を考へることは殆んど不可能であります。従來の經濟書には生産

の要素として土地・資本・労働を説きます。稍新しい學者は更に企業を加へ要素を四として論じます。而して大抵企業を一番終りに置きまして、且つ他の三要素と同一列に見るのでありますが、私の考へでは此は當を得て居らないと存じます。企業の生産に於ける意義は、土地・資本・労働とは著しく違ひます。單に一の要素とか要件とか云ふ可きものではありません。抑も、生産の起る根本の動力は企業にあります。他の要素は企業あつて始めて意味を生ずるものであります。要素はあつても企業がなければ今日に於ては生産は起り得ません。之に反し、企業があれば要素は必ず之に附いて參ります。故に企業は他の生産要素と同一列に置く可きものでなく、又一番終りに説く可きでなく、却つて一番先に來る可きものと考へます。

企業存在の理由

企業存在の理由は今日の國民經濟の性質其ものに在るのです。即ち國民經濟は特殊經濟でなく一の綜合經濟であることは是れであります。綜合經濟には其自から主體がありません、澤山の主體が集まつて始めて綜合經濟なるものが出来るのであります。従つて此綜合經濟は其活動の本源を此等の單位經濟に求めねばなりません。然るに今日は營利經濟の世で、凡ての生産は市場生産でありますから、凡て生産には大なる

危険が伴ふものであります。自足生産は勿論のこと、註文生産に於ても生産に伴ふ危険は誠に小なるものであります。尤も自然的の危険は別です。今日でも農家は常に天候の支配を免れないで、雨量の多少、乾・温の高低等、自分の力を以て左右することの出来ない力によりて支配せられて居ります。従つて此種の危険は之を免れることは出来ません。二百十日だの八朔だのと云ふことは、如何に文明が発達しても之を如何ともすることは出来ません。従つて、折角植付けた作物が皆無作になつたり、減收になつたりする危険は伴つて居ります。然し生産に伴ふ社会的・経済的の危険は殆んどありません。出来た作物は必ず其丈けの需要があるので、思惑違ひ等と云ふことはありません。然るに、今日の市場生産に於ては天然の危険には打勝つ力は増大一致と共に、新たに経済上・社會上の危険が起つて來ました。自分の要する丈けの物とか、客から文せられた丈けの物とかを生産するのなら、經濟上の危険は一もありませんが、市場生産となると、果して其れに對する御客があるかないか、需要は供給と一致するか否か到底分りません。生産者に於て自分の責任を以て自分で見込を立て、生産して客を待つのでありますから、場合によつては御客が非常に多くて生産が不足することもありませうし、又は反對に折角生産はしても、之に對する需要がなくて少しも賣れないと云ふ様なことも起ります。此くの如く昔に於て無かつた特殊の危険の伴ふのが市場生産の特質であります。

### 危険の負擔と利潤の收得

従つて唯人でも此危険を冒す譯には行きませんが、然し又た誰か此危険を冒すにあらざれば、今日の經濟生活に於ける活動は起らないのであります。依つて茲に企業と云ふ一種特別のものが起りまして、此の危険の負擔を爲すことになつたのであります。此く危険を負擔するものは、即ち責任を負ふ人であり、責任を負ふ以上は、又た反對に之に伴ふ特殊の利益を全く己の手に收めるのであります。危険は之を負擔するが、何等特別の利益がないとなると、誰も甘んじて危険を負擔するものはありません。ソコで危険の負擔には特別利益の收得と云ふことが必ず伴ふのであります。此の責任者は又主宰者指導者であります。危険を荷ひ利益を收得する事業を自ら主宰し指導しないと云ふことは矛盾であります、己れが主宰し指導するからこそ、危険も荷へば又其結果たる利益をも收得することが出来るのであります。

### 統一的意思の主體

國民經濟には主體なく従つて一の統一的意思の中心點がないので、云はゞ無政府的狀態にあるものです。企業があつて此統一的意思の主體となります。國民經濟全部に涉る意思決定者はありません、無数の

企業に分れて各々一部分づつ意思を決定するのです。即ち國民經濟に於る生産の秩序を定め其計劃を立つるものは企業で、企業は主宰者・指導者たると共に又必ず創意者です。此れによつて、今日の無政府の國民經濟の活動が大體に於て圓滿に行はれるので、企業がなかつたら其活動は停止する外はないのです。故に企業は今日に於ては國民經濟活動の出立點にして、又到達點なりと申しても差支ないのであります。

### 企業の定義

ソコデ企業に定義を下して見ますれば、企業とは流通經濟に於て、各種の流通行為により、生産及營利に要する物と人とを、己の創意と責任とに於て買ひ入れ、借り入れ、又た雇入れて、費したるものより以上の貨幣價值を作り出すを目的とする經濟を云ふのであります。

### 企業は一の經濟なり

右を少しく説明して見ませう。企業は一の經濟であります。即ち國家經濟や家族經濟と同様に、國民經濟内に於ける一の單位であり一の特殊經濟であります。昔は家族經濟又は氏族經濟の中で一切の生産も消費も行はれまして、其以外に生産支拂を専門とする特殊經濟はなかつたのですが、前に御話致した通り今

日の家族經濟は主として消費計りをする様になり、生産の事は家族以外に分れて出で、茲に生産支拂の組織を作る様になつたのが企業であります。職業と云ふは個人に就て申すことで、家族經濟の主體たる個人が世に處して生活維持の資料を得る爲めに組織的に常業とするものを申すのですが、之は其れ自身一の組織を作りません、家族經濟なる組織中の一人一人が夫々營むことに過ぎないのであります。之が營業となり、業其ものが營利と云ふ目的の爲めに、多數の人を合せて一の組織を形づくる様になれば、其が營業であります。故に企業と營業とは一致する場合が甚だ多いのであります。唯だ營業と云ふときは前にも申した通り、組織的に營まるゝ業の立場から見申すのであります。然るに企業と云ふときは、其が一の組織であり一の經濟であつて獨立の存在を保つと云ふ點から名づけるのであります。

### 純營利組織なり

さて企業なる經濟は純然たる一の營利組織であります。即ち生活維持を直接の目的とする家族經濟とは違ひまして、間接に生活維持の資料を得る爲めに立つるには相違ありませんが、其物自ら生活維持を目的とするのでなく、營利を直接且つ最初の目的とするもの、即ち貨幣價值を作り出し貨幣價值の餘剰を收得すると云ふ一事が其生命とする所であります。然し營利と云ふこと、貨幣價值の餘剰を得ることは、獨り



企業のみが獨占する事でないのは勿論であります。今日の營利經濟に於ては、凡ての生産行爲は何れも先づ以て貨幣價值餘剰の收得に従事して居るもので、是は凡てに共通の點であります。唯企業は此の貨幣價值餘剰收得のみを専門とし、一切の計劃努力をあげて此目的を達する様に致すもので、均しく營利經濟を營むものゝ内最高段に立つものであります。

### 營利のみを以て特徴とする説

故に學者或は營利と云ふことのみを以て企業の特徴とす可しと申します。此は少く言ひ過ぎた事でありまして、實際事實に一致しません。獨逸の學者ではフキリツボヴキツチ氏の如き、營利のみを以て企業の特徴とす可しと論じ、我邦でも關博士の如きは、企業と經營（經營の事は後に御話し致します）との異同を論じて、企業は營利の組織なり經營は生産の組織なりと申されて、企業は生産の組織にあらずと主張して居られますが、此はフキリツボヴキツチ其他の學者が、企業の特徴は營利にありと力説するに基いて、更に此點を強く言はれたので、私の考へでは愈々極端に馳り過ぎた御説で服従し難いのであります。成程、企業は營利を目的とする經濟組織には相違ありません、今日の營利生活の最高頂に立ち、最も純粹に營利行爲を營むものは企業であります。然し其のみが企業の特徴ではありません。

### 更に一の特色あり

此特色に加へて更に一の特色を擧げなければ、未だ企業を十分に説明したとは申せないのであります。其特色とは何であるかと申すと、企業は生産・營利に要するものを、或は買ひ入れ、或は借入れ、或は雇入れて、生産と營利とを營むに方り、己の創意と責任とを以てすることは是れであります。營利行爲の目的、營利生産の目的は貨幣價值の餘剰であります。之を企業利潤と名づけます（利潤の事は後に詳説致します）。偕此の利潤は勞銀・地代・利子等と違つて契約によるものではありません、又た豫め確定したものでありません。地代・利子・勞銀は豫め契約によつて確定したものです。其契約の一方の相手方は即ち企業者であります。故に勞銀・地代・利子を收得するものは（直接消費の場合別として）、生産を創意し其全責任を負ふ所の企業者から拂つて貰ふのです。然るに利潤は左様ではありません。企業者は誰からも別に利潤と云ふ定つた金額を拂つて貰ふものではありません。其生産した貨幣價值の中から地代・利子・勞銀を夫々契約通り支拂つた餘餘が利潤として企業者の手に残るのです。故に私は利潤を殘高所得と名づけて、他の所得とは丸で違つたものと見るのです。此く夫々買入れ借入れ又は雇入れの契約を結ぶとが、既に企業者の創意と責任とによることでありまして、彼は其時既に危険を冒して居るものです。

何となれば唯だ物が出来たと云ふだけでは、貨幣價值が作られたか否かは分りません。之を流通場裡に出して買手を得て始めて定まるのであります。然るに自分の計劃通りの價で賣れるか否か、否、全く買手があるか無いかさへも確知することは出来ないで、唯だ自分が思惑を立て見越しを爲すと云ふに過ぎません。然るに其生産に費用として要する物に就ては夫々に契約を結んで、何程の地代を拂ひませう、何程の利子、何程の勞銀を拂ひますと云ふことを、責任を以て事前に確定して仕舞ふのです。甘く行けば宜しいが萬一外れたとて契約は無効にはなりません。折角生産したものが賣れないからとて、約束した地代なり利子なり、勞銀なりは、今日の私法制度の下に於ては必ず拂はねばならぬのであります。故に企業は其等の契約を結ぶときに既に大なる危険を冒すものであります。其れが、自家の創意に基いて生産を起し、之に對する全責任を負ふと申す所以であります。然るに企業者の冒す危険は單に此れに止りません。生産の始めから終りまで、之に伴ふ一切の危険を冒すのであります。

### 一切を背負つて立つこと

企業と云ふ言葉は獨逸語で *Unternehmung* 佛蘭西語で *Entreprise* 英語で *Undertaking* と申します。何れも「企てる」「引受ける」「敢て爲す」「背負つて立つ」と云ふ意味の言です。一切合切の危険を背負つ

て立つ事は企業の本質であります。同じ事をして此の背負つて立つと云ふ實がなければ、其は企業ではないので、今日の經濟は誰か此く背負つて立つ人のあることを要するのです。其他の人々は唯一部分の事に當り、一部分の責任を負ひ、一部分の危険を冒すのみです。獨り企業者に於て全部を主宰指導し、全部の計劃を立て全部の責任を負ふのであります。ソコデ此く全部の責任を負ふことを『ウンテルネーメン』 *Unternehmen* (獨) 『アントルブランドル』 *entreprendre* (佛) 『アンダーテキー』 *undertake* (英) と云ふのであります。故に關博士の説の如く單に營利の組織と申しただけではまだ不十分でありまして、強て申せば一切を背負つて立つ所の營利の組織と申したら、事實の真相を得て居る事と存じます。

### 危険負擔の意義

ソコデ一切を背負つて立つ事を、危険又は責任の負擔と申しますが、責任と申すと主として法律上の事を申すので、聊か不十分であるかも知れませんが、企業の背負つて立つものは、單に法律上に謂ふ所の責任のみではないのであります。否、經濟上の責任を背負つて立つ事が遙かに肝要であります。經濟上の責任とは何ぞやと申すと、其は即ち利潤危険を冒すと云ふことでもあります。經濟上に於て一切合切の生産の行爲は最後に於て残る所の利潤と云ふものに集中するのです。従つて一切を背負つて立つとは此の利潤の

全部を冒険することでありませぬ。

### 資本冒険の説

リーフマンと申す學者は之れを資本危険の負擔(獨逸語で Kapitalrisiko)であると申して居ります。リーフマン氏の此説に對しては反對する學者が尠からずあります、フキリツボツキ氏の如きも其一人であります。此はリーフマン氏の意味が悪いより寧ろ言葉が悪いのであります。兎に角單に冒険と云ふ丈けでは十分であります。フ氏は危険を冒すことは企業者のみに限らないではないか、勞働者は喰つて行けるか行けぬかの危険を冒して居るものではないかと申して居ります。故にブレンタノ先生は勞働者も亦今日の營利經濟に於ては一の企業者なりと申して居られます。是は餘り意味が廣くなり過ぎて、態々企業と云ふものを別に説明するに無意味になりますから、恩師の御説ですけれども私は賛成は出来ませぬ。そこでリーフマン氏は唯單に危険を冒すと云ふ様な漠然たる事ではない資本危険が企業の特徴だと言ひます。企業者は必ず資本を其事業に投下するもので而して其資本は元も子もなくなつて仕舞ふかも知れず、元は無くならぬでも子は得られないかも知れない、其危険が一番大である、之れを冒すのが企業の特徴だと申すのであります。此説は一應尤もな論であります、私の考へでは言ひ現はし方が不十分であると存じます。

### 此説不十分なり

何故となれば、資本の冒険と云ふことは必ずしも今日の企業に不可缺ものでなく、他方に於て資本の冒険は企業のみに限られたものでないであります。資本を他人に貸す人は何れも多少の危険を冒すので、資本主が皆企業者であれば兎に角、今日の實際に於て資本主と企業者とは別なものである以上、資本の冒険を以て企業の特徴なりと申すのは當を得て居りませぬ。又企業者は大抵多少なりとも自分の資本を其企業に投ずるものですが、場合によつては自分は資本を投じない企業者もありますし、又た企業に要する資本の全部を自分で出す人は寧ろ少く、自分の資本以外他の資本主から資本を借り入れて之を企業に投ずるので、其資本が無くなると云ふ危険は、借りた企業者も負擔しますが、資本の所有主も多少の危険を負擔するものであります。尤も法律上から申せば企業者は資本の缺損に歸した場合誰を相手取つて訴へることも出来ませぬが、企業者に資本を貸した資本主は借手たる企業者を相手取つて償還を求めることが出来ます。乍去所謂無い袖は振れずで、如何に法律上權利があつても無資産になつた企業者からは事實償還して貰ふことは出来ないもので、其貸しは貸倒れとなります。でありますからリーフマン氏が資本冒険を以て企業の特徴なりと主張するのは、聊か不十分なる説と云はなければなりません。

寧ろ利潤冒險にあり

企業者が冒す所の經濟上の危険は何であるかを究めるには、企業が純然たる營利組織なりと云ふ一事を忘れてはならないのであります。フキリツボヰキツチ其他の學者の説も、リーフマン氏等の説も、共に此道理を半分づつ言つたに過ぎぬものと存じます。私の考へ方の通りに致せば、學問上の此二つの反對説を結び付けて、兩者の含む眞理を兼ね併せることが出来ると思ふのであります。

其は即ち企業の冒す所の危険は、營利の目的たる利潤全部に就ての危険であると申す事でありませう。企業は契約によつて利潤を得るのでなく、自らの營む所の結果として、残高として、利潤を得るのであります。此利潤は事前に確定して居るものでありません、其高が何程となるかは、一切の行爲を完了し決算をして見て始めて分るので、其結果或は極く少しのこともあり、多いこともあり、又は皆無であることもありませう。之れが即ち利潤の危険であります、企業の目的は一に全く此特色の危険を帯びて居る利潤に集中して居るものであります、此が其特色であります。此く申すと、其は資本冒險と同じ様に何も企業のみに限つた事ではない、營利經濟の世に於ては凡て皆餘利冒險を爲すものであるとの反對が起るかも知れません。其反對は一應尤もであります。ソコ定義中に特に流通行爲によつて生産に要する物と人とを、

或は買入れ或は借り入れると特に斷つたのであります。同じく餘利危険を冒すものではあります、企業は其餘剰の外に何も得る所がないのです、即ち其の行爲の全部を危険に晒すのであります。物の生産があつても、之に要する物なり人なりに對しては、買入れ借入れの契約を致して居りますから、其分は是非之を拂はなければならぬので、所謂身錢を切つても此義務は果さなければならぬのです。自分の得る所は此等を支拂つて跡に残る餘利丈けです。故に、事業が丸で缺損に歸する場合は勿論の事、多少貨幣價値の増加があつても、餘利は全然残らないこともありませう。企業は其存在の全部をあげ其行爲の一切を盡くして之を不定的な利潤にのみ歸する純營利經濟で、其初めから終まで悉く冒險的であります。之に反し同じ營利經濟にあつても企業以外の經濟は餘利其ものに集中して居るのではありません、少くとも支に當る丈けの收は得られて、所謂收支の適合丈けは出来るのが常で、收支相殺した上に残る餘利丈けが危険を冒すのでありますから、全部の冒險ではありません部分の冒險であります。即ち他のものは純營利的でなく半營利以外の働きが含まれて居ります。企業は利潤のみを目的とする純營利のものであるのです。是が企業と企業以外のものとの異なる所で、企業のみにある所の特色であります。斯くの如き特殊の冒險性を帯びて居る利潤を生命とすると云ふことが企業の企業たる所以であるのです。

利潤冒險の特殊なる點

企業者に土地を貸す地主は地代は取れないこともありませうが、其土地は依然として存して居ります。企業者に労働を賣る労働者は、全生産の終るまで労働を取らずに居るものではありません、其事業の終結を待たず毎日なり毎週なり毎月なり約束の労働を貰ひます。資本主も同様約束の利子を取ります。資本が欠損すれば地主とは違つて資本は無くなつて仕舞ひますが、法律上丈にては少くとも救済を求めることが出来、企業者に資産のある限度に於ては辨済せられます。然るに企業者に至つては何處も尻の持つて行き所がないので、凡て悉く自分の責任に歸着するのであります。即ち利潤は特殊の危険を帯びて居ります、私は之を利潤危険 (Gewinnrisiko) と名けます。利潤危険は地代や賃銀や利子に伴ふ危険よりも、遙かに大なるものであります、又特殊の性質を帯びて居るものであります。此く特殊なる利潤と云ふものが發生し、而して之を收得しやうと云ふ念が總ての經濟的活動の動力となり、其收得を生命とし此特殊の危険を背負つて立つ爲めの特別の經濟組織たる企業が發生し、此企業が營利生産の創意者たり指導者たり主宰者たりと云ふことが、今日の國民經濟の特性であるのです。

企業固有の任務

ソコデ企業の機能を解剖して見ますと、ゾムバルトと申す學者は之に三つあると申します。第一は指揮的及組織的であること、第二は計算的及投機的であること、第三は合理的であること是であります。企業は營利生産を指揮し之に組織を與へます。此が第一の機能であります。而して之を爲すに方つては收支の適合餘剰の殘餘を綿密正確に豫め計算して豫算を立て、其實行に方つては第一編に申した様に、複式簿記の道理により一々記帳して絶えず計算的に其進行を監督し綜攬しなければなりません。即ち計算的であります。企業は利潤冒險を生命とするものですから投機的なものです。然し唯虎俸射利を事とするものではありません。其投機は一々計數に基き打算によつて其々道理のあるもので、従つて合理的でなければなりません。故に又企業者は發見者たり發明家であります。企業が起つてから我々の經濟生活は愈々計算的になりました、複式簿記の貸借観は普く我々を支配します。私は嘗つて之を名けて貸借的的人生觀と申しました、今日我々は其哲學の一部として貸借的的人生觀を脱することが出来ないであります。近來科學的經營法 (Scientific management) と云ふことが亞米利加に起りましたのは、企業中心の經濟生活が合理的科學的に運營せらるゝ上に就て必要であるからであります。又複式簿記の應用も段々普及して、今日では特に

計算學（我邦では會計學・計理學等とも申します、近頃此名稱に就て大分議論をする人もある様ですが、つまらない事で學問上寸益もありません。有りの儘計算學と名けて一向差支はありません）なるものが徐々に進んで來ました。以上企業の機能を三種に分ちましたが實際に於ては別々に離れるものではなく、三者相合して始めて完全なる企業が成立つのであります。此れが最も純粹にして本來的なる企業固有の任務であります。

### 企業者は資本主を兼ね

然るに此任務を盡くす爲めには企業者は大抵の場合に於て更に二つの任務を兼ね有して居るものであります。其一は資本主たることは是れであります。自ら資本を有せず他人か借り入れた資本だけで企業する場合もありますが、今日までの處では其は寧ろ例外に屬するので、大抵は企業者は其企業に要する資本の一部は必ず自分の有する資本を投ずるのが通例であります。故に英國あたりでは、今に企業者の事を單に資本家と唱へて、兩者を同一視して居ります。是は無無論不正確で宜しくありませんが、其れ程に資本家たる任務が企業者に密接に附隨して居ることを示して餘あるのです。

### 雇主たる任務

次には雇主たる任務です。企業には商業の如く餘り多人数の人を使役する必要のないものもあります。大抵な場合に於て殊に工業的企業に於ては多數の労働者を雇入れ雇主として之を使役するのであります。故に企業者は多數の人に主たる心掛と能力とがなければならぬので、此資格を缺けば企業者として成効することは六ヶ敷いのです。今日の如く何等の資産を有せず單に労働力のみを有し、之によつて生活の維持を爲さねばならぬ運命を有して居る人が世の中に澤山にあり、其等の人々が契約により企業者に雇せられ、其命令の下に働くこと云ふことがなければ、企業は成立ちません。又た他方に於て企業なるものがないければ、此等多數の人は生活維持の計を立てることが出來ないので。彼等は獨立して生産に従事しやうと思つても資本を有しません、人から借り得る信用も持つて居ません、又た事業を創設し其計劃を立てて彼等を雇つて呉れるから、分相應の労働を爲すことが出來るので。故に獨逸語では雇主・企業者の事を『労働を與ふる者』Arbeitsgeberとも申します。労働者に仕事を授けて呉れる人と云ふ意味であります（英語や佛語ではソノ可笑しな事は申しません、マルクスが此用語を非常に嫌つたのは、道理上にも亦

た感情上にも正しいことでもあります。此の如く終生唯他人に雇はれる外生活維持の方法を持たぬ労働者階級のあることが企業存在の前提で、而して其が又今日の國民經濟の特色であります。昔は左様ではなかつたのです。此くの如き一種特別の労働者階級があるから労働者問題と云ふものが起るのです。労働者は何時でもありませんが労働者問題は今日の國民經濟特有の問題です、即ち労働者一切の問題が労働者問題たるものではありません、企業者てふ他人に雇はれなければならぬ無資産の労働者の問題が所謂労働者問題であるのであります。労働者と云ふところが問題を惹起するのでなく、無資産にして他人に雇はれると云ふところが問題を惹起するのであります。而して其雇ふ相手は企業者でありますから、何時も労働者問題と云へば相手は企業者でありまして、企業對労働の争ひが労働者問題の最も重なるものとなつて居ります。英吉利流では企業者を資本主と申しますから、之を資本對労働の問題と申しますが、其は間違ひで、資本と労働とが喧嘩するものではありません、雇主と被雇人即ち企業者と労働者とが喧嘩するのであります。

雇主たること資本主たるよりも重し

資本主たる任務は企業者の兼ねる所ではあります、其點が労働者と衝突するものではありません。資本主としては唯だ利子を得るのみで、利子と労働とは利害相反する譯ではないのです。労働者と利害の相反

するは企業者たる任務で、労働と兩立し難しと認められるのは利潤であります、利子ではありません。資本も労働と同じく企業者の手によつて結び付けらるゝ一の生産要素に過ぎないものであります。資本も労働も同じく企業者の手で結び付けられて始めて其働きを成し得るものです。獨立獨行の出来ないことは資本も労働も同じであります。而して企業中心の今日の營利經濟に於ては、資本も労働も土地と同じく一の費用科目たるに止るのであります。何れも契約によつて一定の報酬を受けて、企業者の目的を達する手段として使はれる丈けのものであります。企業者は自ら定めた創意により、自ら立てた計劃に基き、之に必要相應な土地や資本や労働を集めて其計劃の實現を圖るのです。唯だ企業者は自ら土地を有し、自ら労働を爲すを要しませんが、資本は少くとも一部分は自分のものを醸出することが、今日の實狀であるのですが、以上御話致した通り、此點も段々變化して來まして、資本家たる任務は必ずしも入用ならざること地主たる資格の入用ならざるが如くなる場合が殖えて來ました。獨り雇主たる任務は常に企業者から離れることは出来ない、従つて企業者對労働者の利害の衝突は到底免れ難いので、此衝突を無くして兩者が一致し得る様にするには如何にす可きかは甚だ重大な問題であります。従つて企業者は事業の創意者指導者として十分の能力を具へた丈けではいけません、雇主として、人の取扱ひ者として、兵に將たる器として、十分の能力を具へることが肝要であります。此點が缺ければ如何に創意に富み指導の能に長じ

ても駄目です。物の取扱丈けに長けたのでいけません、必ず人の取扱ひに長けて居らねばなりません。

### 企業廢止は不可能

而して企業は人格の自由と私有財産制度とを前提とする今日の國民經濟あつて始めて成立し得るものがあります。人格の自由殊に職業の自由・契約の自由があればこそ、多數の労働者を必要に應じて何時にても雇入れることが出来るのです。私有財産が認められて居るからこそ、一定の資本を任意に企業の目的に副ふ様に處分することが出来るのであります。若し人格の自由と私有財産制とを廢すれば企業は成立しないのであります。故に生産要素たる資本の廢止を主張する社會主義者は、又企業全廢を唱へるのであります。資本主義の廢止と云ふのは即ち企業廢止の事であり、今日の企業中心の經濟組織を廢するにあらざれば労働問題の解決は望む可からずと云ふのであります。兎に角企業を廢すれば今日の經濟組織は全く面目を一變することは疑ひない事です。我々は社會主義者の主張に賛成することの出来ないものであります。成程企業中心の今日の經濟組織には澤山の弊害のあることは我々も十分に認めます。乍併企業を廢して凡て共同經濟に一任すること社會主義者の主張する様にして、果して今日丈けの經濟的活動が繼續し得られるかと云ふに、其れは望み難きことです。猶此問題は後編に於て少し詳しく御話を致す積りであり

ます。兎に角現在の國民經濟の組織に於ては、企業は不可缺中心たり生産の動力たることは事實明白であります。我々は如何なる經濟現象に付いても、企業のことを忘れてはならないのであります。以上を以て企業の意義及び任務の主要を御話致しました。よつて是れから企業者の手によつて結び付けられて生産實行の手段となる所謂生産要素、即ち土地・労働及資本に就て其々説明致します。本編に於ては先づ土地と人口との事を御話致しましう。

## 第十八章 土地の不變性と可變性

### 生産の三要素

企業の手によつて結び付けられるものは所謂生産要素であります。企業以外の生産に於ても此生産要素なるものは肝要なものであります。生産要素は普通之を土地・労働・資本の三と致します。或は土地と資本とを總稱して物的生産要素とし、労働を人的要素とする人もあります。



### 土地の技術的性質

さて生産要素の中先づ第一に考へなければならぬものは土地であります。土地は抑も人間の生活に根據を與へるものでありまして、人事一切の行動は土地の上に行はれるのであります。人間の生活には一定の空間、一定の場所がなくてはなりません。此空間は一定の土地の面積によつて與へられるのであります。此の面積は常に我々に一定の場所を與へるのみではありません、我々があらゆる天然の賜を利用するにも必ず一定の土地と結び付かねばなりません。空氣を取り光線を取り温度湿度を取るにも、必ず一定の土地がなければならぬのであります。又我々は地中から無機物礦物を取ります、植物を栽培するにも土地が要ります。かくて技術上より見れば、土地の性質には三つあることになりました。第一は負擔力であり、す、即ち我々に生活の本據を與へ有機無機の材料を包蔵する力であり、第二は栽培力であり、植物の根を把持する力を申すのです、第三は營養力であり、植ゑた植物を養ひ育つる力であり、以上三つの性質は之を土地の技術上の性質と申します。土地の技術上の性質は専ら農學就中土壤學の研究する所に屬します。經濟上では以上の性質を他の點から觀察致すのです。

### 土地の經濟上の性質

土地を經濟上より見れば其性質には二つあります。私は之れを土地の不變性と可變性と名けます。人力を以て増減することの出来ないのを不變性と名けます。此不變性は又之を土地の固有性とも獨占性とも、有限性とも名けても宜しいのであります。第二の可變性とは一名資本性又は單に豊度とも申します。人力によりて増減し得る性質の謂であります、即ち土地の物理的及化學的の性質（栽培力と營養力）であります。以下兩者に就て少し説明致しませう。

### 土地の延長即ち面積

土地の不變性とは土地のみに固有の性質で、他のものは之を有して居らないのであります。故に之を土地の固有性とも申します。此の固有性は極めて有限のものであると云ふことが其特質で、従つて獨占的のものであります。一度或人が之を得れば他人は最早如何ともすることが出来ないであります。其は何であるかと云ふと、即ち延長と云ふことであります。土地は地球の表面の一部でありまして必ず延長を有して居ります。一定の土地と申せば即ち地球表面の一部分の事であり、然るに地球の表面は昔から今

日まで定まつて居りまして天變地異を除くの外、殆んど之を増減することが出来ないであります。尤も海を埋立てたり沼を浚つたりして多少土地を増すことも出来ませんが、其は地球表面の全體から申せば誠に九牛の一毛に過ぎないので、大體に於て土地の延長なるものは不増不減人間が如何に工夫を凝らしても如何することも出来ないであります。さて延長の一定部分を面積と申します。面積のない土地と云ふものはないのであります。土地と云ふときには必ず地球表面の何千萬か何百萬分の一かに當る延長のことでありまして、此性質は土地許りに特有の性質でありまして、而して經濟上最も肝要なる特性となります。一定の面積は唯一つしかないのに之に代るものはありません。或人が其一定の面積を占有すれば、他人は之を如何ともすることが出来ないであります。即ち土地の面積は有限であつて又獨占的のものであります。我々は此く不増不減であり極めて有限であり而して獨占的なる土地の面積を支配するにあらざれば、何等の生産を営むことが出来ないといふ運命の下に立つて居るものであります。我々に如何に働く能力があり意思があつても之を實現す可き本據たる土地は此の如きものでありますから、我々は能力あり意思ありと申すだけで、之を空しく抑へて置かねばならぬ場合が澤山あります。天は我々に空氣・日光・温度・湿度等を惜氣もなく與へますが、我々は之を受取る可き土地面積の得られない爲め、天の好意に孤負せねばならぬことが屢々起るのであります。

### 地位と氣候

然るに面積許りあつても此等のものを必ずしも遺憾なく享有し得る譯ではありません、茲に更にモ一つの條件が要ります。即ち其一定の面積が適當の地位にあることは是れであります。北極に土地を得たとて農業を営むことは出来ません、我々の力を實現し天然の賜を利用するには其々に應じた地理的地位が要ります。我々が温度・日光・空氣・湿度の適當の分量を利用し得るや否やは氣候の如何によつて支配されます。氣候とは土地の地位が此等のものを享有する状態を云ふのであります。尤も人力によつて多少は氣候を變ずるとは出来ない譯ではありません。北海道は人口が殖えてから以前に比べると氣候が幾分か温かになつたとか聞いて居ります。臺灣も日本が領有してから氣候がよくなり悪疫は少くなつたと申します。我々は森林を開墾したり灌漑疏水したりすることによつて、幾分か氣候を變ずることが出来るのであります。併し此も氣候全體から云へば極微少のもので、地位によつて定まつて居る氣候は大體に於て之を如何ともする能はざるものと申さねばなりません。而して此氣候の如何は即ち其土地を享有する温度・日光・空氣及湿度を定めるものであります。従つて如何なる作物を如何云ふ風に植ゑ可きかも之によつて定まります。獨り農業許りではありません、工業も氣候によつて大に支配せられます。紡績工場は湿度の足りな

い所では縁がよく引けません。英國のランカシア地方は湿度が十分あります、従つて世界第一の紡績地となつて居ます。化学工業でも左様であります。我邦では漆器陶器等の製造にも氣候が關係あると承はつて居ります。以上は地位の技術上の影響でもありますが、地位は又人文上・經濟上にも影響があります。商業は勿論の事工業でも農業でも土地の地位によつて經濟上左右せられることは大であります。大都會の附近、天然的に交通の便なる所、川に沿ひ海に臨んだ所と山間交通不便な所や人口稀少な僻地とは同じ生産を営むにも大變な違ひがあります。

### 有限不足に打克つ必要

即ち土地の不變性・有限性・獨占性は第一に一定の面積を占める必要上經濟上に大關係があり、第二には其面積のある地位の如何によりて更に有限的又獨占的となります。我々は此兩個の有限に打克たねばならぬのであります。人間經濟活動の發端は實に此の土地の不變性に打克つことにあります。而して前編既に申上げた通り、今日の國民經濟に於ては私有財産制が認められ土地は皆私有に屬して居りますから、此有限此の獨占は更に痛切に感ぜられるのであります。即ち自然的に其面積と其地位とが人力を以て左右し能はざる有限的獨占的のものであるに加へて、タトへ適當の面積と地位とがあつても、他人が之を私有し

て居る爲に、望む所のものが得られないで見す見す起し得る生産も起せないで已むことが往々あります。近世交通の發達は地位の獨占的性質を著しく征服しました、今迄生産に不適當なりと認められた所も、鐵道が開通し、運河が出来、港灣が設けられた爲めに生産に適する様になり、又海運の發達によつて遠く海外へ農産物を輸出することも出来るやうになりました。歐洲では段々食料の不足を告げて來ましたが、汽船便が開け運賃が非常に安くなつた爲に、米國・アルチエンチン等からドン／＼小麦を供給する様になりました。我々は各種の工夫によつて土地の不變性に伴ふ有限不足に打克つことを圖つて居ります。向後益々此方面に向つて努力せねばならぬのであります。併し乍ら如何に工夫し如何に努力しても、土地の不變性其ものを全く排除することは出来ません、此は根本的事實であります。企業は先其第一の生産要素たる土地に就て營だ天然の有限に對して戦ふのみならず、又社會に有限即ち私有制度による獨占到對して之を支配しなければならぬのです。之が生産の第一の費用項目で、如何なる企業と雖も土地を買ひ又は借りる爲めに費用を提供することを免れる譯には行かないのであります。言葉を換へて申せば、今日の經濟生活は先第一に土地の獨占到性に打克つことを要し、其爲めに多額の犠牲を拂つて掛からなければならぬ様に出來て居るのであります。

恢復し得ざる可變性

次に土地には可變性があります。此は人力を以て増減し得る性質です。従つて此點に於ては土地は獨占的ではなく、又有限的のものではないのです。但し此可變性は又細かに申すと、恢復し得る可變性と、恢復し得ざる可變性とに別たなければなりません。即ち一度取つても又人力によつて之を恢復し、何處までも之を利用し得る可變性もあれば、一度利用すれば其れ丈けで盡きて仕舞つて他の面積を求めなければならぬものもあります。此の恢復し得ざる可變性は其作用に於て殆んど不變性と同様であります。即ち礦物發掘の場合之れであります。地中に在る礦物は一度掘り取れば、其れ丈け減じて仕舞ひ、礦脈は段々深く掘るか先へ掘つて行くかせねばならないのです。故に嚴格に申せば此場合は寧ろ不變性の利用と見た方が適當であります。然し實際に於ては、僅々數年で礦脈が盡きる様の土地を開掘することは先づ以て稀で、大抵は十年二十年否數十年に涉つて同一地區で探掘をやり、其探掘の成績は設備の如何による場合が多いのであります。經濟上の立場から見れば、恢復し得る可變性の利用即ち農業と同じ様であります。唯其獨占的性質と其有限的性質とは農業用地よりは遙かに大であります。従つて礦山地代は農業地代とは別にして考へなければならぬのであります。

恢復し得る可變性即ち豊度

さて農業に就て申しますと、土地の可變性は恢復し得るものに屬します。此の可變性は何れの土地も同様に之を有して居るものではありません。土地によつて大變甲乙があります。農業は唯だ一定の面積を占め一定の地位を得た許りでは出来ません。其土壤に適當の性質が具はつて居らねばなりません。此が可變性(豊度)です。此を更らに別けますと一物理的性質と二化學的性質とあります。此二つの性質あればこそ土地は栽培力と營養力とを持つのであります。而して二つながら人力によつて増すことも減ずることも出来る所謂恢復し得る可變性であります。

土地の物理的性質

物理的性質と申すのは、第一に土壤の硬軟であります。即ち柔き根と雖も之を把持し得る軟さがなければいけません、岩の様な土地では植物を栽培することが出来ません。然し又た餘り軟か過ぎると根が保ちません、砂地は農業には適しません、硬軟其宜しきを得ることが必要であります。第二には地質の疎密であります。地質が餘り疎でありますと(砂地の如き)地中の水がドンドン流れ去つて植物が之を吸収

することが出来ませんで、動もすると地が乾き過ぎて植物が枯れて仕舞ひます。又た水の流過が激しい爲め地中の養分までも流し去つて仕舞ひます。反對に餘り密に過ぎると（粘土質の如き）水や空氣の流通が悪くていけません。さて此の硬軟疎密の物理的性質は第一に天然の賜でありまして、土地其れ自らに備はつて居るのであります。即ち人が何もしなくても、適度の硬軟疎密を有して居る土地もあり、其缺けて居る土地もあります。之れと共に、此の兩性質は人力を以て著しく變化することの出来るものであります。天然上は硬軟疎密の度が不適當であつて到底耕作に堪へない土地でも、農夫粒々辛苦の結果耕作に堪へる様になり、中には甚だ豊沃の土地となるものが尠からずあります。之れが農業の進歩・土地の改良と申すものであります。又た百姓が年々繰返して營む耘鋤耕作の業は絶えず此等の性質を増し、又た段々其性質の無くなつて行くのを恢復して居るのであります。又た肥料を施すのは、單に化學的養分を増す許りでなく、以上の物理的性質を改良する効能があるのであります。地質が餘り硬過ぎたり密過ぎたりするときは、之を耘つたり又肥料を施したりして軟かにし、疎にします。肥料は重い地質を軽くし、砂地をしつかりしたりする効があるのです。

### 土地の化學的性質

第二に化學的性質です。土地は植物を養ふ爲めに、色々な無機物を含有して居らねばなりません。其無機物（礦物）は唯有る許りではいけません、植物の根が之を吸収し得る様になつて居らねばなりません、植物は主として有機物即ち炭素と酸素や水素や窒素やの化合物から成立つものです。植物は此等の有機物を主として空氣及び水から攝取するのであります。然し植物は其極小部分即ち約二十分の一は無機物から成つて居ります。此無機物は必ず之を地中より得ねばならぬのです。土地は大抵必ず若干の無機物を含んで居りまして、従つて人力を以て加へなくとも、何等かの植物を育つる力を具備して居るのであります。然し其含有する礦物に過不足がありまして、或物は十分にあつても他の物に缺けて居る爲め、人間の欲する植物を養ふことの出来ない土地が幾らもあります。其缺けて困るのは燐酸とか加里とを石灰とかです。植物によつては此等無機物を極く少ししか要せぬものもあります。左様云ふ植物は無機物に乏しい土地でも育ちます。然し此れは寧ろ例外で、以上の無機物の凡て又は或るもの、乏しい土地は、原則として植物を育つる力がないものであります。ソコで此決點を人力によつて補ふのであります、即ち物理的性質に缺けてさへ居なければ、無機物の不足は施肥によつて容易に補ふことが出来ます。石灰や人造肥料を施して不毛の土地を變じて豊沃な土地とした例は實に無数であります。此點に於て農藝化學の進歩は絶大の効を奏したのであります。英國のチャンネル諸島の如き地位も善く、氣候も温和であります、燐酸と加里と

が缺けた爲め收穫が少かつたのを、此兩者を補つてから非常に豊沃の土地となりました。其の海岸に打寄られる海草を焼いて肥料として以來、走りの馬鈴薯（氣候が暖い爲め英本島より早く取れますから）が一エーカーに付て千圓も取れる様になつたと云ひます。獨り施肥許りではありません、耘鋤によつて地中深く埋もれて居る無機物を空氣に觸れしめて、植物が之を吸収し得る様にすることも出来ます。

### 豊度の減退

此くの如く土地の物理的並に化學的性質は人力によつて著しく増進するを得るものであります。此と共に、又た人力によつて之を減少することも出来ます。森林を濫伐した結果洪水が出て、折角栽培力のあつた土地が之を失ふことが往々あります。又は濫耕の爲めに化學的性質を失つて地力の盡きる例は礫山あります。此くて嘗ては豊沃であつた土地が豊度を減じ、又は全く荒蕪地廢田となります。

以上は主として農業用の土地に就いて御話したのでありますが、土地は住地ともなり、工業用にも供せられ、鑛山としても用ひられ、道路としても用ひられます。然し經濟上土地の主たる用は農業で、生産要素としての土地は主として耕地として用ひられる場合でありますから、他は推して知ることが出来ます。

昭和三年五月五日 印刷  
昭和三年五月十日 發行

### 廉刷版經濟學全集

第二集國民經濟講話 第一分册

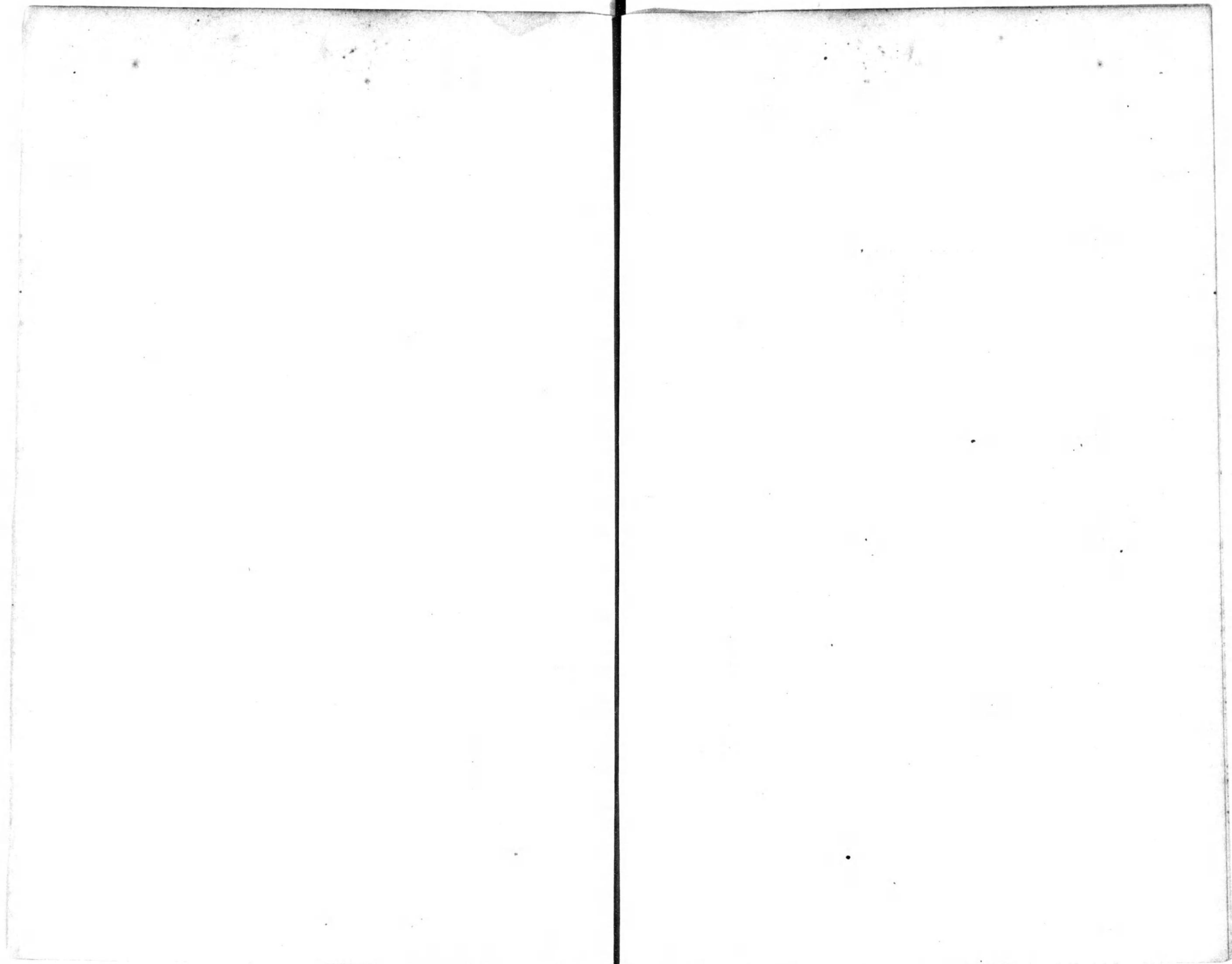


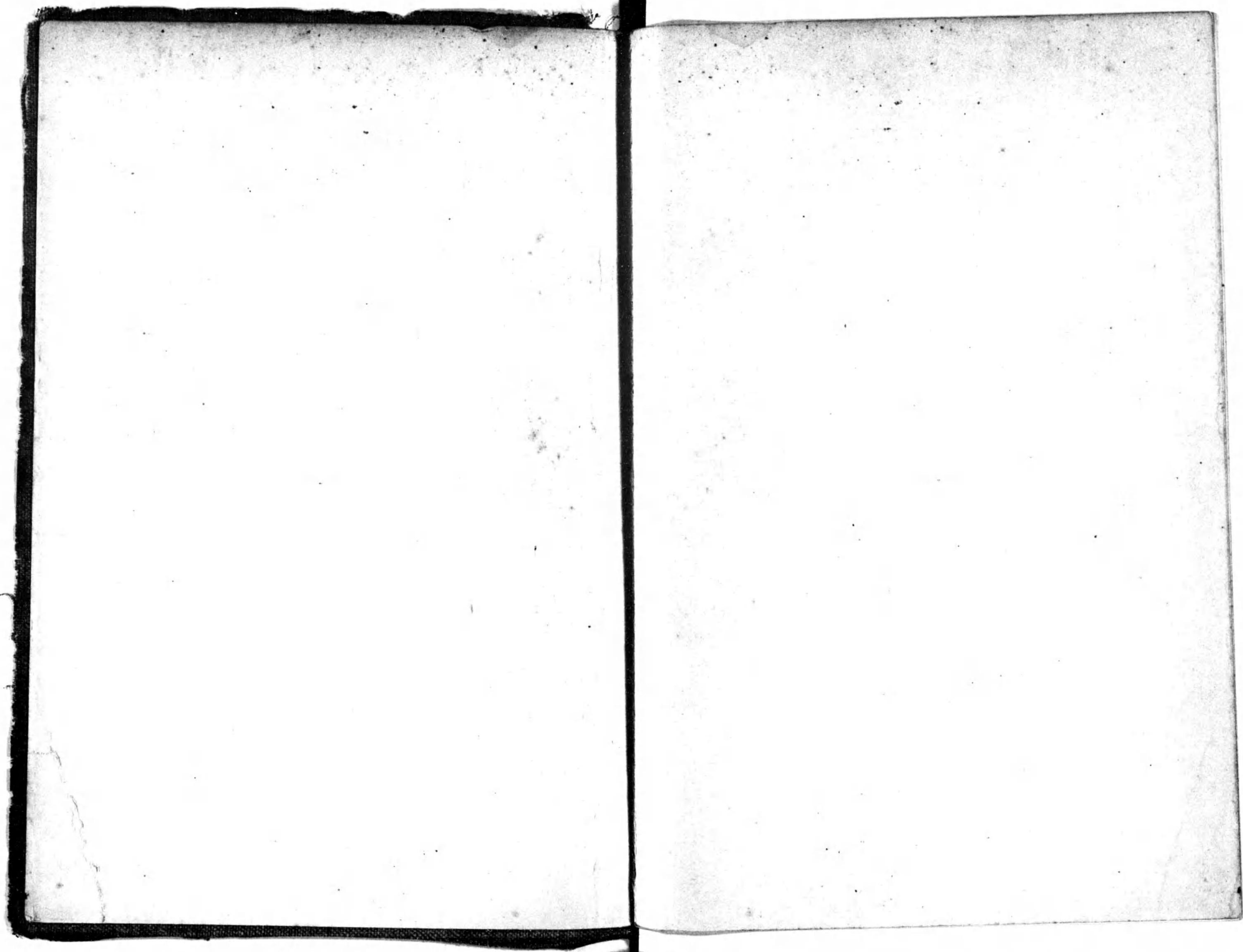
著者	福田 徳三
發行者	株式會社 同文館 東京市神田區表神保町二番地
印刷者	森山 讓二
印刷所	鷺見 九市
製本者	株式會社 秀英舎 東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二 山縣 純次

發 兌

東京市神田區表神保町二番地  
電話神田九三三・三〇八〇番  
振替貯金口座東京一三五番

株式會社 同文館







終

